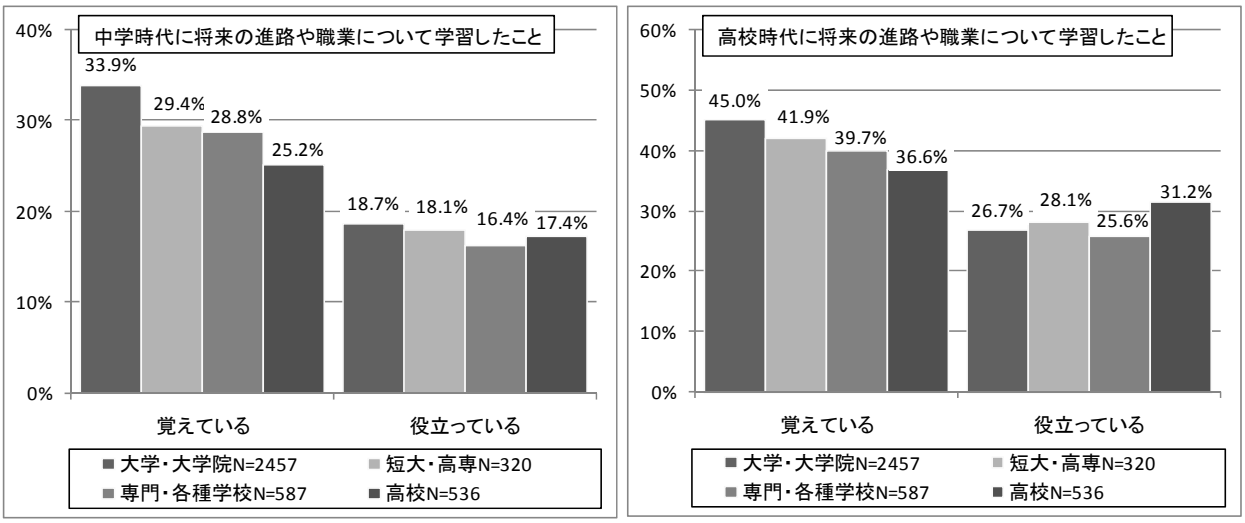
第3章　学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連

1. 最終学歴別にみた学校時代のキャリア教育の評価

本章では、学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連を検討する。

図表３－１に、最終学歴別の学校時代のキャリア教育の評価を示した。「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」のどちらの設問でも、「覚えている」割合は、最終学歴が「大学・大学院」の者で最も高く、最終学歴が「高校」の者で最も低かった。一方、「役立っている」割合については、統計的に有意な違いはみられなかった。以上の結果から、最終学歴とキャリア教育の関連については、学歴が高いほど中学・高校時代のキャリア教育を覚えているが、役立っているか否かの評価については学歴による違いがないと言える。



図表３－１　最終学歴別の学校時代のキャリア教育の評価

図表３－２には、最終学歴別に、学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。最終学歴ごとに中学・高校・大学のそれぞれで行った授業や行事には違いがみられた。まず、最終学歴が、①「大学・大学院」の回答者は他の学歴の回答者に比べて、高校時代の「進路に関する二者面談や三者面談」、大学時代の「職業興味や職業適性などの検査」「自分の性格を理解するための検査」を覚えているとする割合が高かった。②「短大・高専」では、中学時代・高校時代の「履歴書の書き方や面接試験の練習」、短大・高専時代の「進路に関する二者面談や三者面談」、大学時代の「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」を覚えているとする割合が高かった。③「専門・各種学校」では、総じて学校時代の授業や行事を広範に覚えていると回答する割合が高かったが、共通して「履歴書の書き方や面接試験の練習」を覚えているとする割合が高かった他、「就職活動の進め方や試験対策の授業」「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」など、具体的な就職活動の進め方やマナーなどの授業を覚えてい

るとする割合が高かったのが目をひく。④「高校」では、中学時代・高校時代に行った授業や行事が記憶にあるとする割合が高かったが、特に最終学歴となる高校の授業や行事は広く覚えているとする割合が高かった。

以上の結果をまとめると、大卒者は、高校時代の（おそらくは進学に向けた）二者面談・三者面談のみを覚えており、大学時代の自己理解テストをよく覚えていると回答したが、総じて言えば、あまり記憶にあると回答した割合は少なかったと言える。短大・高専、専門・各種学校を卒業した者は、具体的な就職活動の進め方やコミュニケーション・マナーに関する授業を覚えていると回答する傾向が強かった。また、高卒者にとっては、総じて、高校のキャリア教育の重要性が改めて示された結果となった。

図表３－２　最終学歴別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

		大学・大学院 N=2457	短大・高専 N=320	専門・各種学校 N=587	高校 N=536
中学	職業興味や職業適性などの検査	17.6%	21.6%	21.1%	23.7%
	職場体験学習やインターンシップ	24.5%	29.1%	26.6%	33.2%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	8.9%	15.3%	15.2%	14.9%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	3.0%	6.3%	7.3%	7.5%
高校	職業興味や職業適性などの検査	30.9%	31.6%	35.3%	45.0%
	職業や仕事を調べる授業	18.8%	21.3%	24.0%	32.8%
	職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業	13.9%	15.0%	14.7%	21.3%
	職場体験学習やインターンシップ	7.4%	12.5%	17.5%	23.7%
	進路に関する二者面談や三者面談	82.7%	75.6%	79.4%	73.5%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	15.1%	30.6%	36.3%	58.4%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	10.1%	17.5%	20.6%	40.7%
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	10.1%	18.4%	17.9%	30.8%
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	6.0%	7.2%	8.3%	14.7%
大学	職業興味や職業適性などの検査	54.9%	40.3%	41.2%	
	自分の性格を理解するための検査	53.3%	38.1%	38.3%	
	職業や仕事を調べる授業	22.8%	26.3%	33.4%	
	進路に関する二者面談や三者面談	17.4%	26.3%	30.5%	
	進路に関する個別相談やカウンセリング	32.3%	33.1%	40.0%	
	進路の目標や計画を考える授業	19.8%	20.9%	28.8%	
	履歴書の書き方や面接試験の練習	53.6%	59.4%	61.8%	
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	32.9%	45.6%	54.0%	
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	26.5%	18.4%	21.0%	

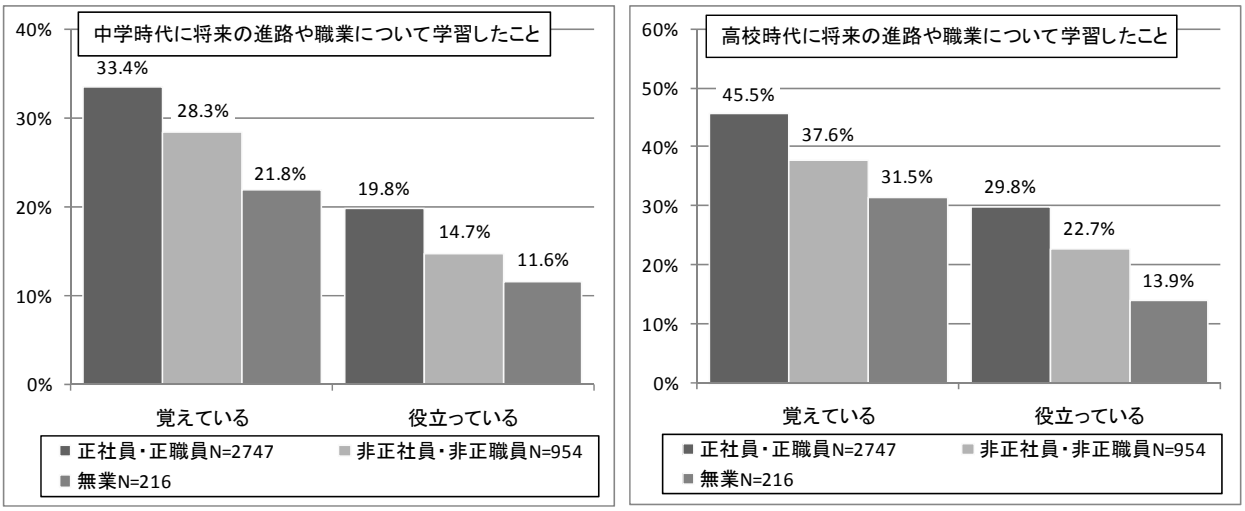
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

2. 学校卒業直後の就労形態別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表３－３には、学校卒業直後の就労形態別にみた学校時代のキャリア教育の評価を示した。図中の数値は「かなり覚えている＋やや覚えている」または「かなり役立っている＋やや役立っている」の割合である。

図から、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」のどちらについても「覚えている」「役立っている」と回答した割合は、学校卒業直後の就労形態が「正社員・正職員」＞「非正社員・非正職員」＞「無業」の順に統計的に有意に高かった。学校卒業直後に正社員として就職した者が最も学校時代の

キャリア教育に対する評価が高く、学校卒業直後に非正社員、無業だった者ほど学校時代のキャリア教育に対する評価が低かった。



図表３－３　学校卒業直後の就労形態別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表３－４は、具体的に、学校時代に行ったどのような授業や行事が記憶にあるのかを検討した結果である。表から、「非正社員・非正職員」が記憶に残っていると回答した割合が高いのは、中学時代の「自分の性格を理解するための検査」のみであり、その他は、概して「正社員・正職員」が記憶に残っていると回答した割合が高かった。特に、「正社員・正職員」は大学等の時代の授業や行事を記憶に残っていると回答する割合が高く、ほぼ全項目にわたって「非正社員・非正職員」「無業」よりも値が大きかった。

図表３－４　学校卒業直後の就労形態別にみた
学校時代に行った授業や行事で記憶に残っているもの

		正社員・正職員 N=2747	非正社員・非正職員 N=954	無業 N=216
中学	自分の性格を理解するための検査	19.8%	27.1%	20.4%
高校	進路に関する二者面談や三者面談	81.6%	78.1%	73.6%
大学	職業興味や職業適性などの検査	49.1%	31.7%	32.4%
	自分の性格を理解するための検査	47.5%	29.8%	31.5%
	職業や仕事を調べる授業	24.0%	16.6%	11.6%
	職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業	20.4%	13.0%	15.3%
	職場体験学習やインターンシップ	34.3%	22.4%	19.0%
	進路に関する二者面談や三者面談	19.1%	14.2%	16.7%
	進路に関する個別相談やカウンセリング	32.3%	21.5%	24.1%
	進路の目標や計画を考える授業	20.1%	15.3%	12.5%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	53.7%	35.0%	30.6%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	54.4%	35.2%	32.9%
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	35.4%	26.8%	22.2%

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

これは、図表３－５に示したとおり、学校卒業直後の就労形態と最終学歴に強い関連性があるからであると解釈される。今回の調査で全般的に観察されるとおり、回答者は自分がいちばん最後に通った就職する直前の学校のキャリア教育を高く評価する傾向が強い。図表３－５から明らかなように、「正社員・正職員」は最終学歴が「大学・大学院」であるものが多く、そのため「正社員・正職員」は図表３－４にみられるように、大学時代に行った進路・キャリア関連の授業や行事を記憶にあると回答する割合が高かったと推測される。

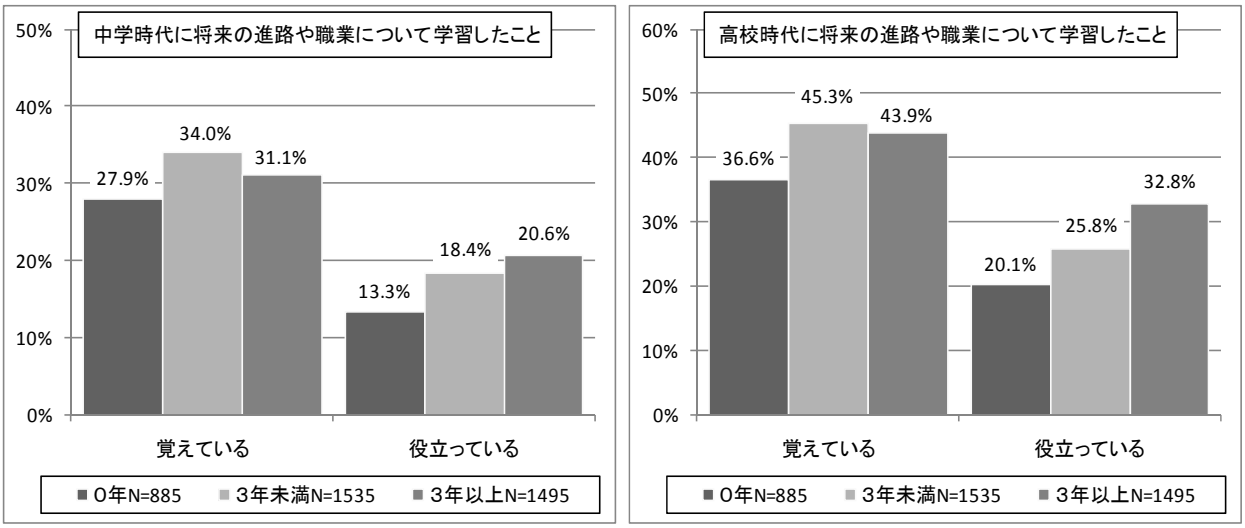
図表3－5　学校卒業直後の就労形態と最終学歴の関連

卒業直後 / 最終学歴	正社員・正職員 N=2747	非正社員・非正職員 N=954	無業 N=216
大学・大学院	68.5%	47.6%	55.6%
短大・高専	8.3%	8.4%	6.5%
専門・各種学校	12.1%	23.7%	13.4%
高校	10.9%	19.5%	24.1%
中学	0.0%	0.1%	0.5%
その他	0.3%	0.7%	0.0%

3. 正社員・非正社員就労期間別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表３－６に、正社員就労期間別の学校時代のキャリア教育の評価を示した。図中の数値は「かなり覚えている＋やや覚えている」または「かなり役立っている＋やや役立っている」の割合である。また、「０年」「３年未満」「３年以上」は、正社員としての就労期間を示すものであり、それぞれ正社員経験のない者、正社員経験が３年未満の者、正社員経験が３年以上の者を示す。

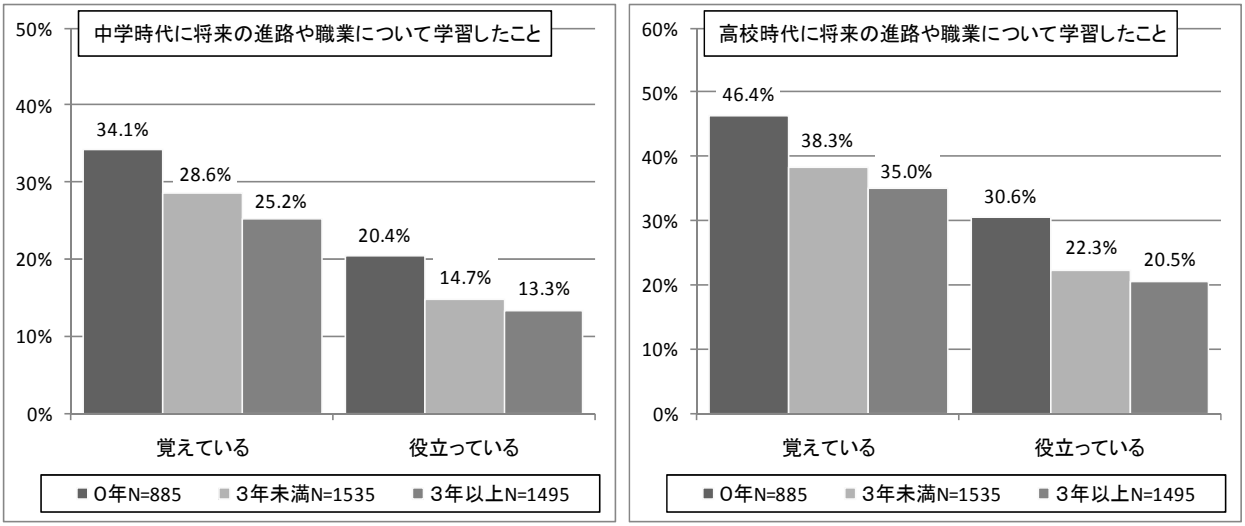
図から、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」ともに、「覚えている」割合は正社員経験が「３年未満」の者が



図表3－6　正社員就労期間別の学校時代のキャリア教育の評価

最も多いが、「役立っている」割合は正社員経験が「３年以上」の者が最も多いことが示される。本調査の回答者には年齢が 23 歳および 24 歳の者も含まれているため、大学卒業後、継続して正社員として勤め続けた場合でも正社員経験が３年未満になる者が多かったことによると思われる。ただし、25 歳以上の回答者を抜き出して検討した場合にも、やはり正社員経験が「３年未満」の回答者が「覚えている」「役立っている」と回答する割合が高かったことから、いくつかの要因が複合的に影響を与えていると解釈するのが順当であろう。

なお、非正社員就労期間別に学校時代のキャリア教育の評価を検討した結果を、図表３－７に示した。その結果、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」のいずれの設問においても、「覚えている」割合、「役立っている」割合は、非正社員経験が「０年」＞「３年未満」＞「３年以上」の順に大きく、非正社員経験は短い者の方が、総じて学校時代のキャリア教育を覚えており、役立っていると回答していたことが示される。



図表３－７　非正社員就労期間別の学校時代のキャリア教育の評価

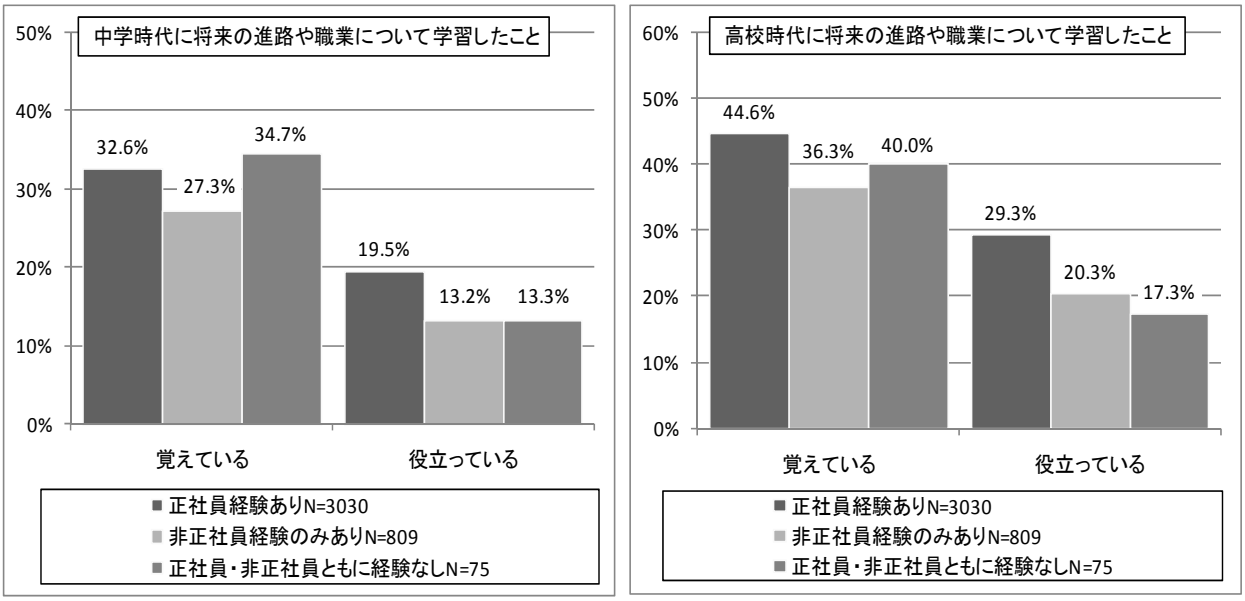
非正社員としての就労期間で学校時代のキャリア教育の評価に明確な違いがみられたので、図表３－８では、非正社員就労期間別に学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。その結果、非正社員就労期間が「０年」の者はおもに大学時代に行った授業や行事が記憶にあると回答していた。一方、非正社員としての就労期間がある者は中学時代、高校時代の授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。特に、「履歴書の書き方や面接試験の練習」「就職活動の進め方や試験対策の授業」の割合が高かった。

図表３－８　非正社員就労期間別の学校時代に行った授業や行事で記憶に残っているもの

非正規社員・非正規職員経験		0年 N=2452	3年未満 N=892	3年以上 N=571
中学	自分の性格を理解するための検査	19.7%	23.8%	27.0%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	10.1%	13.3%	13.1%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	3.8%	4.8%	7.0%
高校	履歴書の書き方や面接試験の練習	24.3%	23.4%	33.8%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	15.8%	15.6%	20.8%
大学	職業興味や職業適性などの検査	49.2%	41.5%	25.7%
	自分の性格を理解するための検査	48.0%	38.8%	24.0%
	職業や仕事を調べる授業	23.7%	19.4%	15.4%
	職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業	21.0%	16.5%	10.5%
	職場体験学習やインターンシップ	35.0%	26.8%	17.7%
	ボランティアなどの体験活動	15.6%	17.9%	11.6%
	進路に関する二者面談や三者面談	19.3%	17.7%	10.9%
	進路に関する個別相談やカウンセリング	31.7%	28.0%	20.0%
	進路の目標や計画を考える授業	20.1%	18.3%	12.1%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	52.4%	45.7%	31.3%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	54.1%	45.0%	29.9%
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	35.0%	32.4%	22.1%
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	24.2%	18.7%	13.3%

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

ここまで非正社員経験の長さでキャリア教育の評価が異なることが繰り返し示されたので、さらに追加分析として、今回の調査回答者を、①正社員経験が少しでもある「正社員経験あり」群、②非正社員経験のみの「非正社員経験のみあり」群、③正社員経験・非正社員経験のいずれもない「正社員・非正社員ともに経験なし」群の３つに回答者を分類して、学校時代のキャリア教育の評価を比較した。図表３－９にその結果を示した。



図表３－９　学校卒業後の正社員・非正社員経験別の学校時代のキャリア教育の評価

図のうち、統計的に有意な結果は「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」が「役立っている」割合、「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えている」割合、「役立っている」割合であった。いずれも「正社員経験あり」の者が「覚えている」または「役立っている」と回答する割合が高かった。図表３－９のうち、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えている」割合では「正社員・非正社員ともに経験なし」の値が大きくなっているが、統計的に有意ではなかった。

図表３－１０に、正社員経験・非正社員経験の有無別に学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。統計的に有意な差がみられた項目はあまり多くなく、高校時代の「進路に関する二者面談や三者面談」の他は、大学時代における「職業興味や職業適性などの検査」「自分の性格を理解するための検査」「職場体験学習やインターンシップ」「履歴書の書き方や面接試験の練習」などであった。

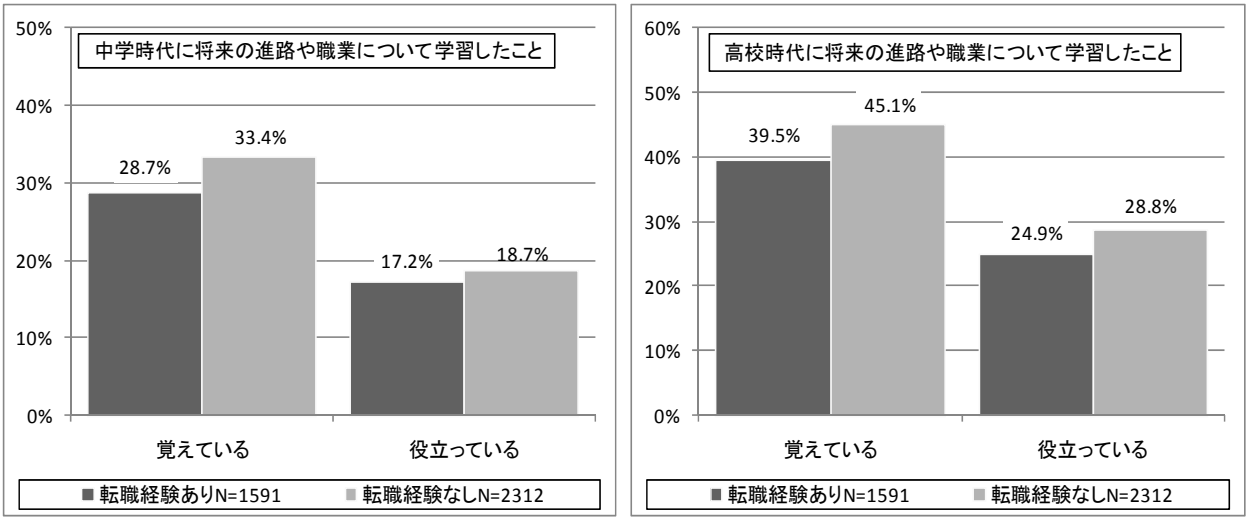
図表３－１０　学校卒業後の正社員・非正社員経験別の
学校時代に行った授業や行事で記憶に残っているもの

		正社員経験あり N=3030	非正社員経験のみあり N=809	正社員非正社員ともに経験なし N=75
高校	進路に関する二者面談や三者面談	81.4%	76.9%	68.0%
大学	職業興味や職業適性などの検査	47.1%	33.5%	30.7%
	自分の性格を理解するための検査	45.7%	31.0%	28.0%
	職業や仕事を調べる授業	23.2%	15.7%	17.3%
	職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業	19.8%	13.3%	18.7%
	職場体験学習やインターンシップ	32.9%	22.2%	25.3%
	進路に関する個別相談やカウンセリング	31.0%	22.1%	29.3%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	51.7%	35.6%	26.7%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	52.1%	36.5%	32.0%
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	34.1%	27.3%	25.3%
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	22.6%	16.9%	18.7%

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

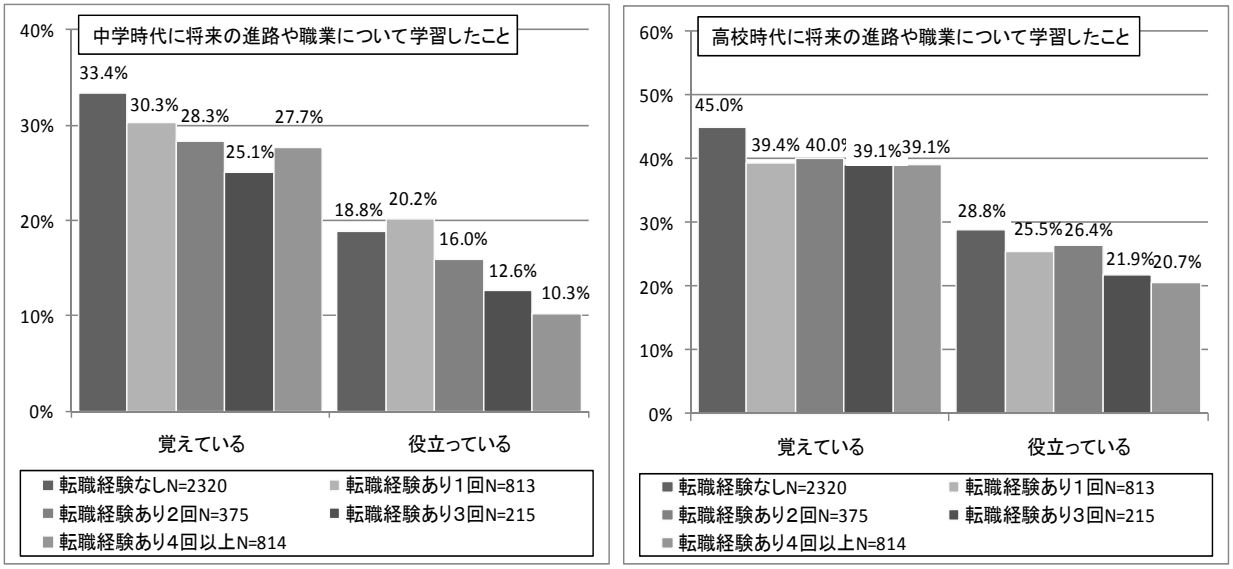
4. 転職経験別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表３－１１に、転職経験の有無別の学校時代のキャリア教育の評価を示した。図中の数値は「かなり覚えている＋やや覚えている」または「かなり役立っている＋やや役立っている」の割合である。図から、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」ともに、「転職経験なし」の回答者の方が「覚えている」「役立っている」のいずれの場合も値が高いことが示される。転職経験はない者の方が、総じて、学校時代のキャリア教育に対する評価は良いことが分かる。



図表３－１１　転職経験の有無別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表３－１２には、さらに詳しく検討するために、転職回数別の学校時代のキャリア教育の評価を示した。図表３－１２うち、１％水準で統計的に有意なのは「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」が「役立っている」とする割合であり、「転職経験あり３回」「転職経験あり４回以上」の２つの群で他よりも有意に役立っているとする割合が低かった。他の箇所も有意水準を切り上げて５％水準とした場合には、統計的に有意な差がみられており、図からうかがえるように、いずれも転職回数が多くなるほど、学校時代のキャリア教育は役立っていないと解釈できる結果であった。



図表３－１２　転職回数別にみた学校時代のキャリア教育の評価

5. 学校卒業後のキャリア別にみた学校時代のキャリア教育の評価

(1)キャリアパターン別の検討

図表３－１３には、学校卒業後のキャリア別にみた中学時代のキャリア教育の評価を示した。ここまで見てきた回答のうち、「学歴」「学校卒業直後の働き方」「非正規就労経験」「転職経験」をとりあげて組み合わせ、２（大卒・大卒以外）×３（正規・非正規・無業）×３（なし・３年以内・３年以上）×２（あり・なし）の 36 パターンを作り、どのパターンが中学時代のキャリア教育を「覚えている」または「役立っている」と回答する割合が高いのか・低いのかを示したものである。なお、上記 36 パターンの中には、回答者がいない組み合わせもあったことから、30 名以上の回答者がみられた 17 パターンを検討対象とした。

表から、まず中学時代のキャリア教育を「覚えている」割合が最も高いのは、最終学歴が「大卒」で学校卒業後「正規」社員として就職し、非正規就労経験は「なし」で転職経験は「あり」の者であることが示される。また、次に中学時代のキャリア教育を覚えている割合が高いのは「大卒」で「正規」社員として就職し、非正規就労経験が「なし」、転職経験も「なし」の者であった。概して言えば、中学時代のキャリア教育を覚えている割合が高いのは大卒で正社員として就職したか、または正社員として就職しなかった場合でも非正規就労期間が３年以内と比較的短い回答者であったことが示される。

中学時代のキャリア教育が「役立っている」割合についても同様の傾向がみられたが、最終学歴が「大卒」の者がよりいっそう多くなっているのが目立つ。

さらに、「覚えている」「役立っている」の割合が低い方では、学校卒業後「無業」または「非正規」として社会に出た者、非正規就労期間が「３年以上」と比較的長い者が多い。

図表３－13　学校卒業後のキャリア別にみた中学時代のキャリア教育の評価

覚えている

学歴	学校卒業直後の働き方	非正規就労経験	転職経験	覚えている割合
大卒	正規	なし	あり	36.2%
大卒	正規	なし	なし	35.5%
大卒	非正規	3年以内	あり	33.9%
大卒	正規	3年以内	なし	32.4%
大卒	非正規	3年以内	なし	31.8%
合計				31.6%
大卒	非正規	3年以上	なし	30.8%
大卒	正規	3年以内	あり	30.7%
大卒以外	非正規	3年以内	なし	30.6%
大卒以外	非正規	3年以内	あり	29.5%
大卒以外	正規	なし	あり	27.4%
大卒以外	非正規	3年以上	なし	26.7%
大卒	無業	なし	なし	26.3%
大卒	非正規	3年以上	あり	23.2%
大卒以外	正規	3年以上	あり	22.5%
大卒以外	非正規	3年以上	あり	22.1%
大卒	無業	3年以内	なし	18.5%
大卒以外	無業	3年以内	なし	12.9%

役立っている

学歴	学校卒業直後の働き方	非正規就労経験	転職経験	役立っている割合
大卒	非正規	3年以内	あり	22.9%
大卒	正規	3年以内	なし	21.6%
大卒以外	正規	なし	あり	21.6%
大卒	正規	なし	あり	21.6%
大卒	正規	なし	なし	20.2%
大卒	非正規	3年以上	なし	20.0%
大卒	無業	なし	なし	18.4%
合計				18.2%
大卒以外	正規	3年以上	あり	16.9%
大卒以外	非正規	3年以内	あり	16.5%
大卒以外	無業	3年以内	なし	12.9%
大卒以外	非正規	3年以上	なし	12.8%
大卒	非正規	3年以内	なし	12.5%
大卒	非正規	3年以上	あり	12.2%
大卒以外	非正規	3年以上	あり	11.8%
大卒以外	非正規	3年以内	なし	11.3%
大卒	正規	3年以内	あり	10.7%
大卒	無業	3年以内	なし	9.3%

図表３－１４には、学校卒業後のキャリア別にみた高校時代のキャリア教育の評価を示した。上記図表３－１３の中学時代のキャリア教育の評価と同様、「学歴」「学校卒業直後の働き方」「非正規就労経験」「転職経験」を組み合わせた 17 パターンを検討対象とした。

表から、高校時代のキャリア教育を「覚えている」割合が最も高いのは、最終学歴が「大卒」で学校卒業後「正規」社員として就職し、非正規就労経験「なし」、転職経験「なし」の者であることが示される。概して言えば、大卒で正規社員として就職、非正規就労経験は短い者が高校時代のキャリア教育を覚えていると回答した割合が高い。一方、「覚えている」割合が低い方では、「大卒以外」「無業」、非正規就労経験「３年以上」が比較的多くみられる。

高校時代のキャリア教育が「役立っている」割合については解釈が難しく、学歴、学校卒業直後の働き方、非正規就労経験、転職経験のいずれかの要因が大きく影響しているという傾向が読み取りにくい。「役立っている」割合が低い方についても、学校卒業後の働き方が「無業」である者が目立つが、それ以外の傾向はみられなかった。

図表３－１４　学校卒業後のキャリア別にみた高校時代のキャリア教育の評価

覚えている					役立っている				
学歴	学校卒業直後の働き方	非正規就労経験	転職経験	覚えている割合	学歴	学校卒業直後の働き方	非正規就労経験	転職経験	役立っている割合
大卒	正規	なし	なし	48.3%	大卒以外	正規	なし	あり	33.5%
大卒	非正規	3年以内	あり	47.5%	大卒以外	正規	3年以上	あり	32.4%
大卒以外	正規	なし	あり	46.1%	大卒	非正規	3年以内	あり	30.5%
大卒	正規	3年以内	なし	43.2%	大卒	正規	なし	なし	30.3%
合計				43.0%	合計				26.6%
大卒	正規	なし	あり	42.8%	大卒	正規	なし	あり	26.1%
大卒	非正規	3年以内	なし	42.0%	大卒以外	非正規	3年以内	あり	25.2%
大卒	非正規	3年以上	なし	41.5%	大卒	非正規	3年以上	なし	24.6%
大卒以外	正規	3年以上	あり	40.8%	大卒	非正規	3年以内	なし	24.4%
大卒以外	非正規	3年以内	あり	40.3%	大卒	正規	3年以内	なし	24.3%
大卒以外	非正規	3年以上	なし	38.4%	大卒以外	非正規	3年以上	なし	22.1%
大卒	無業	なし	なし	36.8%	大卒	非正規	3年以上	あり	19.5%
大卒	正規	3年以内	あり	36.0%	大卒以外	非正規	3年以内	なし	17.7%
大卒	非正規	3年以上	あり	34.1%	大卒以外	非正規	3年以上	あり	17.6%
大卒以外	非正規	3年以内	なし	32.3%	大卒以外	無業	3年以内	なし	16.1%
大卒	無業	3年以内	なし	31.5%	大卒	無業	なし	なし	15.8%
大卒以外	非正規	3年以上	あり	27.9%	大卒	正規	3年以内	あり	12.7%
大卒以外	無業	3年以内	なし	19.4%	大卒	無業	3年以内	なし	11.1%

(2)分散分析による検討

上述のとおり、学校卒業後のキャリアと高校時代のキャリア教育の評価との関連については、おおむね、最終学歴が「大卒」、学校卒業後の働き方が「正規」、非正規就労経験「なし」、転職経験「なし」で学校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」と評価する傾向が強かった。一方、最終学歴が「大卒以外」、学校卒業後の働き方が「無業」で学校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」と評価する傾向が低かった。

ただし、上記の傾向は明確ではなく、特に高校時代のキャリア教育が「役立っている」か

否かについてはキャリアパターンによる一定の傾向が読み取りにくい結果となっていた。

そこで、以下に、「学歴」「学校卒業直後の働き方」「非正規就労経験」「転職経験」を独立変数、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えているか」「役立っているか」を従属変数とした４要因分散分析を行い、主効果・交互作用を含めて各要因が与える影響を検討した。

図表３－１５は、学校卒業後のキャリアの各要因が中学時代のキャリア教育の評価に与える影響に関する分散分析の結果を示したものである。表から、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えているか」では「学校卒業後の働き方」の要因が 1%水準で統計的に有意であった。また「役立っているか」では「学校卒業後の働き方」の要因が 10%水準の有意傾向にとどまった。

図表3－15 学校卒業後のキャリアの各要因が中学時代のキャリア教育の評価に与える影響

（4要因分散分析結果）

中学時代に将来の進路や職業について学習したこと【覚えていますか】		F 値	sig.
主効果	最終学歴	0.50	
	学校卒業直後の働き方	4.30	**
	非正規就労経験	0.51	
	転職経験	0.84	
2 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方	0.51	
	最終学歴＊非正規就労経験	0.30	
	最終学歴＊転職経験	0.33	
	学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験	1.46	
	学校卒業直後の働き方＊転職経験	1.22	
	非正規就労経験＊転職経験	1.29	
3 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験	0.79	
	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊転職経験	0.21	
	最終学歴＊非正規就労経験＊転職経験	0.03	
	学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験＊転職経験	0.74	
4 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験＊転職経験	0.77	

中学時代に将来の進路や職業について学習したこと【役立っていますか】		F 値	sig.
主効果	最終学歴	0.43	
	学校卒業直後の働き方	2.67	+
	非正規就労経験	0.94	
	転職経験	0.90	
2 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方	0.31	
	最終学歴＊非正規就労経験	0.11	
	最終学歴＊転職経験	0.13	
	学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験	0.65	
	学校卒業直後の働き方＊転職経験	0.19	
	非正規就労経験＊転職経験	0.71	
3 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験	1.34	
	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊転職経験	1.93	
	最終学歴＊非正規就労経験＊転職経験	1.48	
	学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験＊転職経験	1.21	
4 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験＊転職経験	1.71	

※表は分散分析表。sig.は有意水準、** p<.01 ＊ p<.05 + p<.10。

図表３－１６は、学校卒業後のキャリアの各要因が高校時代のキャリア教育の評価に与える影響に関する分散分析の結果を示したものである。表から、「高校時代に将来の進路や職業

について学習したこと」を「覚えている」では「学校卒業後の働き方」の要因が 1%水準で統計的に有意であった。一方、「役立っている」ではかなり複雑な結果がみられており、４次の交互作用が 1%水準で統計的に有意であった。これは４つの要因全てが相互に関わりあいながら高校時代のキャリア教育が「役立っている」という評価に影響を与えていることを示す結果であり、高校時代のキャリア教育の評価が学校卒業後のキャリアと複雑に関連する様を改めて確認できる結果となった。

これらの結果を整理すると、学校卒業後のキャリアと学校時代のキャリア教育の評価は、端的には学校卒業後どのような形で社会に出たかに集約される面があり、基本的には、学校卒業後、正社員・正職員の形で出た回答者の方が学校時代のキャリア教育に対する評価は総じて良い。ただし、全般的にみれば、高校時代のキャリア教育が「役立っているか」の結果に象徴されるように、学校時代のキャリア教育の評価と学校卒業後のキャリアには複雑な関連がみられると言える。

図表３－１６ 学校卒業後のキャリアの各要因が高校時代のキャリア教育の評価に与える影響

（4要因分散分析結果）

高校時代に将来の進路や職業について学習したこと【覚えていますか】		F 値	sig.
主効果	最終学歴	0.63	
	学校卒業直後の働き方	3.55	*
	非正規就労経験	0.13	
	転職経験	0.06	
2 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方	0.14	
	最終学歴＊非正規就労経験	0.53	
	最終学歴＊転職経験	0.01	
	学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験	1.54	
	学校卒業直後の働き方＊転職経験	1.16	
	非正規就労経験＊転職経験	1.22	
3 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験	1.04	
	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊転職経験	0.46	
	最終学歴＊非正規就労経験＊転職経験	0.27	
	学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験＊転職経験	0.95	
4 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験＊転職経験	0.61	

高校時代に将来の進路や職業について学習したこと【役立っていますか】		F 値	sig.
主効果	最終学歴	0.15	
	学校卒業直後の働き方	4.26	**
	非正規就労経験	1.06	
	転職経験	0.13	
2 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方	0.37	
	最終学歴＊非正規就労経験	0.06	
	最終学歴＊転職経験	0.00	
	学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験	0.95	
	学校卒業直後の働き方＊転職経験	0.26	
	非正規就労経験＊転職経験	1.06	
3 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験	2.46	*
	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊転職経験	2.90	*
	最終学歴＊非正規就労経験＊転職経験	2.65	+
	学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験＊転職経験	1.14	
4 次交互作用	最終学歴＊学校卒業直後の働き方＊非正規就労経験＊転職経験	2.94	*

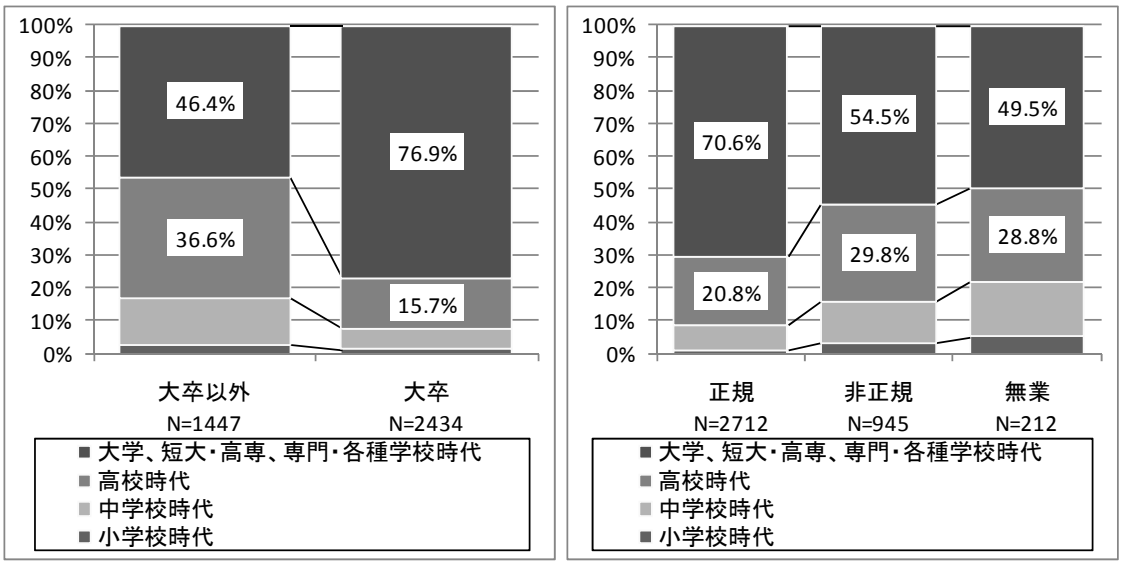
※表は分散分析表。sig.は有意水準、** p<.01 * p<.05 + p<.10。

⑶各要因別にみた小学校～大学までのキャリア教育に対する評価

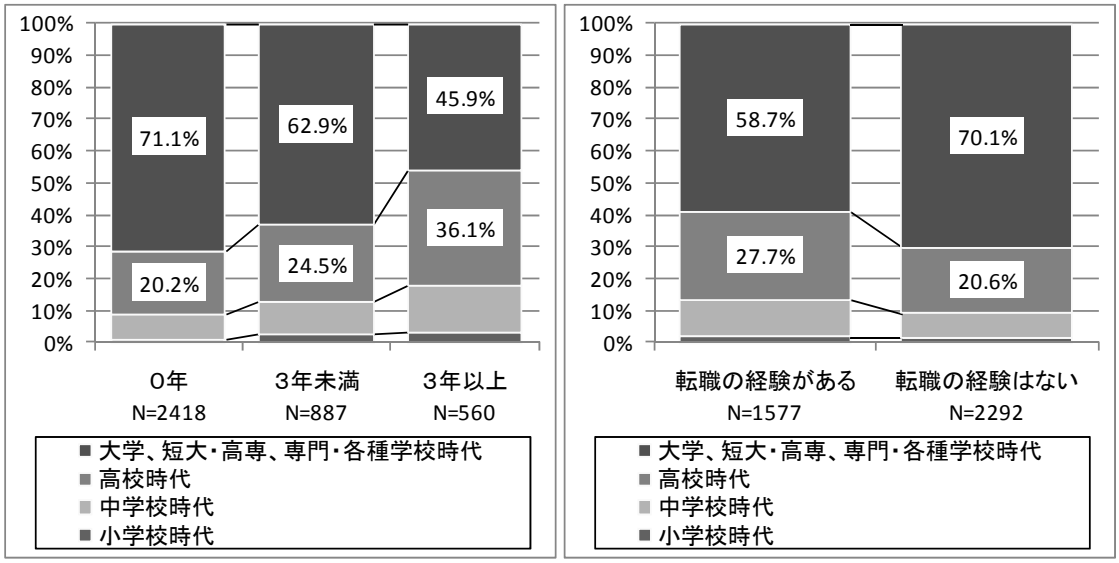
学校時代のキャリア教育の評価が学校卒業後のキャリアと複雑に関連する理由の１つとして、もともと中学時代のキャリア教育および高校時代のキャリア教育が多義的であり、現在、学校を卒業して社会人となっている若者に様々な形で影響を及ぼしているからであると考えられる。

例えば、ここまで示した結果のとおり、総じて言えば、学校時代のキャリア教育は「大卒」「卒業直後に正規就労」「非正規就労経験なし」「転職経験なし」といった、いわば「直線的」なキャリアを歩んだ回答者で評価が高い。これは、自分なりに順風満帆であると感じているキャリアを歩んだ者が、その理由の１つを学校時代にキャリアについて学んだことに帰するために、結果的に両者に関連性がみられると解釈される。また、さらに言えば、学校時代にキャリアについて学んだことが役立ったという認識があるからこそ、「直線的」なキャリアを歩むことができたという解釈も、あるいは成り立つと思われる。

しかし、本調査で繰り返し示されるとおり、回答者は最後に通った学校のキャリア教育を最も高く評価する傾向が強い。そのため、図表３－１７および図表３－１８に示したとおり、「大卒」「卒業直後に正規就労」「非正規就労経験なし」「転職経験なし」の回答者は、自分が将来の進路や職業について最も学習したのは「大学、短大・高専、専門・各種学校」であると回答する傾向が強い。



図表３－１７　最終学歴別（左）、学校卒業直後の働き方別（右）の
将来の進路や職業について最も学習したと思う時期



図表３－１８　非正規就労期間別（左）、転職経験の有無別（右）の
将来の進路や職業について最も学習したと思う時期

６. 学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連ついて（まとめ）

ここまでの議論を整理すると、学校卒業後から現在までのキャリアと学校時代のキャリア教育に対する評価の関連は、以下の２点に集約される。

①「直線的」なキャリアを歩んだ回答者は、総じて学校のキャリア教育を高く評価するので中学・高校のキャリア教育の評価も高い。一方で、「直線的」なキャリアを歩んだ回答者は高等教育機関まで進む者が多いので、実際には自分が最後に通った大学、短大・高専、専門・各種学校時代に進路や職業について最も学習したと考えている。

②「直線的」なキャリアを歩んでこなかった回答者は、総じて学校のキャリア教育を高く評価しないので中学・高校のキャリア教育の評価も低い。一方で「直線的」なキャリアを歩まなかった回答者は高等教育機関まで進む者が多くないので、実際には自分が最後に通った高校（または中学）時代に進路や職業について最も学習したと考えている。

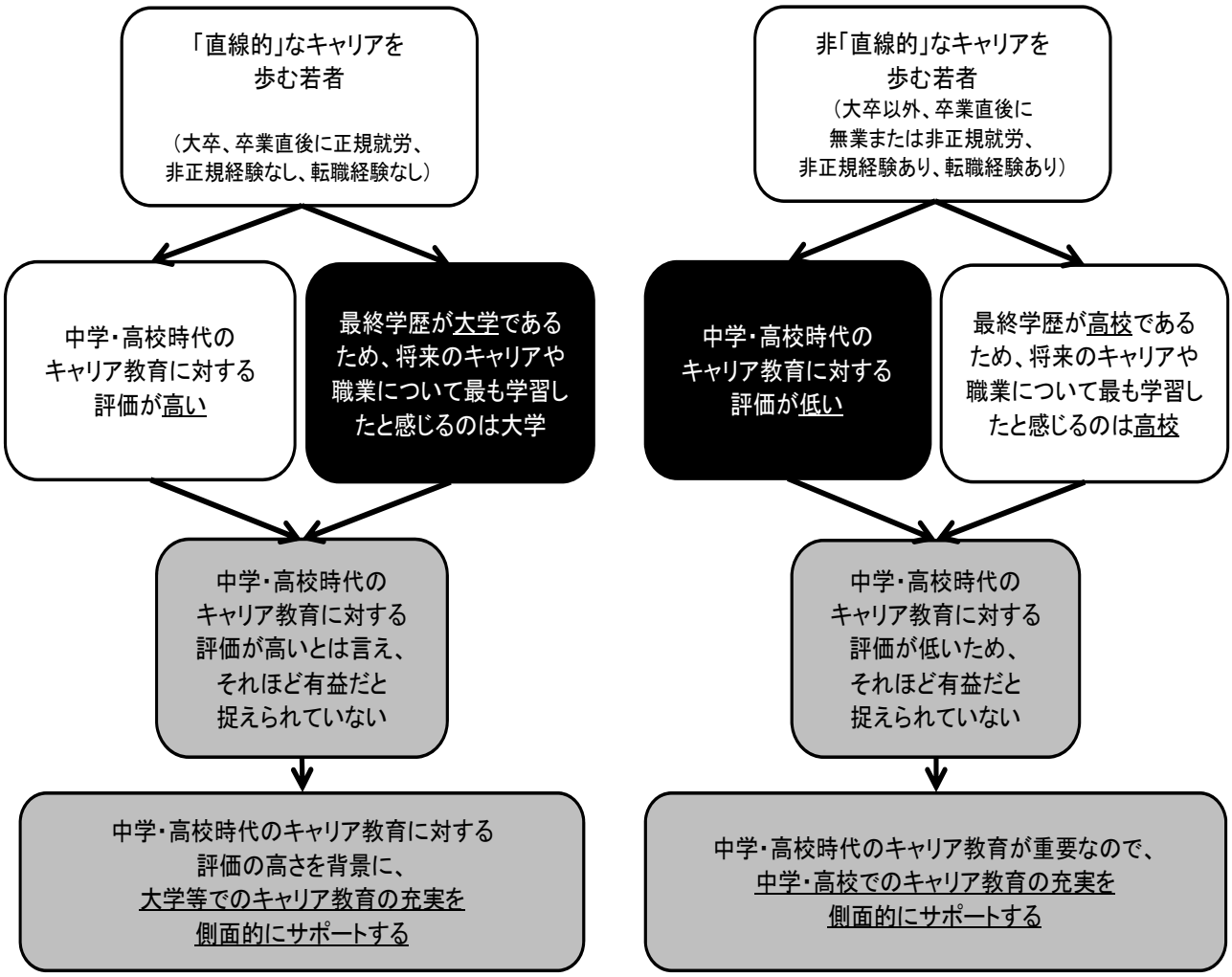
上述の点を、図表３－１９に模式図として整理した。「直線的」なキャリアを歩んだ者、そうでない者のどちらの場合でも中高時代のキャリア教育の評価が十分に高くならない理由をプロセス図としてとりまとめた。

これらの結果から引き出せるインプリケーションは、「直線的」なキャリアを歩む者にとっては大学等が、また「直線的」ではないキャリアを歩む者にとっては、中学および高校が、将来の進路や職業について最も学習する場であるということである。

したがって、第一には、「直線的」なキャリアを歩む若者を対象に、従来、労働行政の立場からはあまり積極的な支援を提供してこなかった大学等の高等教育機関に向けた職業相談・職業指導の充実、もしくはキャリア・コンサルティングのよりいっそうの普及といったことが考えられる。しかしながら、第二には、大学等に進学しない「直線的」でないキャリアを

歩む若者は、将来の進路や職業について学ぶ機会が中学や高校に限定されるということをより重視し、中学・高校のキャリア教育に労働行政の側から積極的に参画していく必要がある。キャリア教育の対象となる若者にはおおむね２つの層があり、そのそれぞれに対して適切なキャリア教育を側面的に支援していくという視点が重要となると思われる。

従来、キャリア教育においては、学校時代の若者をいくつかの層に分けて、その対象層ごとに特化したキャリア教育を提供するといった議論はあまり十分ではなかった。学校教育現場において若者を層化して捉えるということがあまり馴染まないことも、その理由の１つにある。しかし、労働行政の側からは、学校卒業後のキャリアという面で明らかに異なる２つの対象層を意識して、学校では行うことのできないキャリア教育の側面的なサポートを提供することができる。学校を出て新たに職業生活に入ってくる若者達のキャリアにあった形での支援を、よりきめ細かく議論することの重要性があると考えられる。



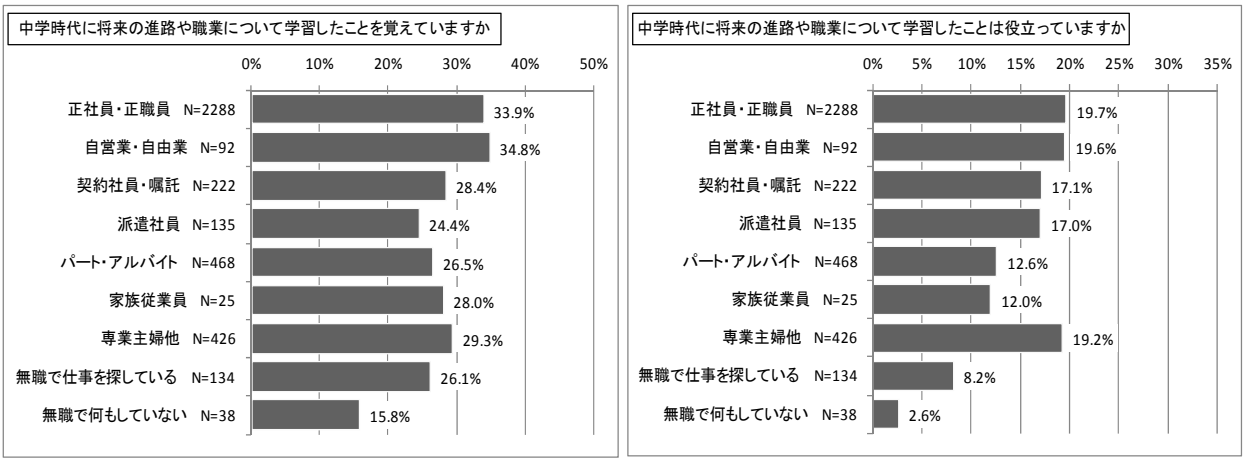
図表３－１９　学校卒業後のキャリアによる学校時代のキャリア教育に対する評価の違い
および今後のキャリア教育において求められるサポート
（模式図）

第4章　学校時代のキャリア教育と現在の就労状況との関連

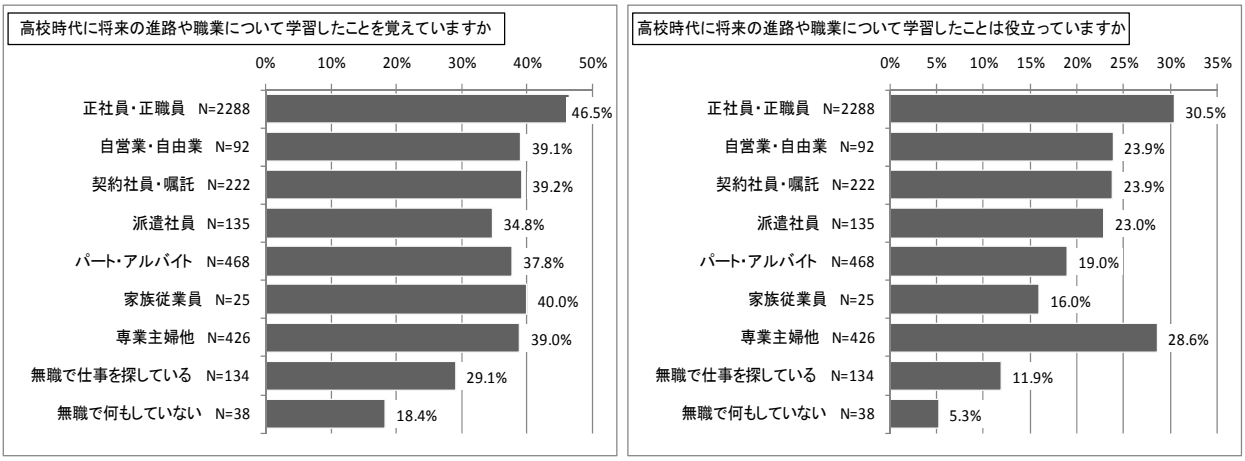
1. 現在の仕事上の立場別の学校時代のキャリア教育の評価

本章では、学校時代のキャリア教育と現在の就労状況および就労意識との関連を検討する。

図表４－１および図表４－２に、現在の仕事上の立場別の学校時代のキャリア教育の評価を示した。図中の数値は「かなり覚えている＋やや覚えている」または「かなり役立っている＋やや役立っている」の割合である。



図表４－１　現在の仕事上の立場別にみた学校時代のキャリア教育の評価「覚えている」



図表４－２　現在の仕事上の立場別にみた学校時代のキャリア教育の評価「役立っている」

図表４－１および図表４－２ともに、統計的な検定結果は類似しており、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」のいずれの場合でも、「正社員・正職員」が「覚えている」または「役立っている」と回答する割合が統計的に有意に高く、「パート・アルバイト」「無職で仕事を探している」「無職で何もしていない」の３つの群で「覚えている」または「役立っている」と回答する割合が統計

的に有意に低い。他はグラフの見かけ上、高低はあるが、各群の人数の関係などから統計的に有意な結果とならなかった。

以上の結果から、総じて言えば、学校時代のキャリア教育の評価は正社員で高く、パート・アルバイトを中心とする非正規就労層、失業者、無業者では低かったと言える。

図表４－３には、現在の仕事上の立場別に、学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。図表４－３では、より集約して結果を示すために、図表４－１および図表４－２の「正社員・正職員」「自営業・自由業」をまとめて「正規就労・自営」、「契約社員・嘱託」「派遣社員」「パート・アルバイト」をまとめて「非正規就労」、「専業主婦（主夫）、または結婚の準備」を「主婦」、「家族従業員」「無職で仕事を探している」「無職で何もしていない」その他をまとめて「無業その他」として集計を行った。

その結果、「正規就労・自営」はおもに大学時代に行った授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。それに対して、「非正規就労」「主婦」は高校時代に行った授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。どちらの場合も、「職場体験学習やインターンシップ」「履歴書の書き方や面接試験の練習」「就職活動の進め方や試験対策の授業」「労働法（働くことに関する法律）に関する授業」が記憶にあるとして挙げられる割合が他に比べて高かった。その他、「正規就労・自営」は中学時代のボランティアなどの体験活動や高校時代の二者面談・三者面談、「無業その他」は中学時代の履歴書の書き方などの授業が記憶にある割合が他と比較して高かった。

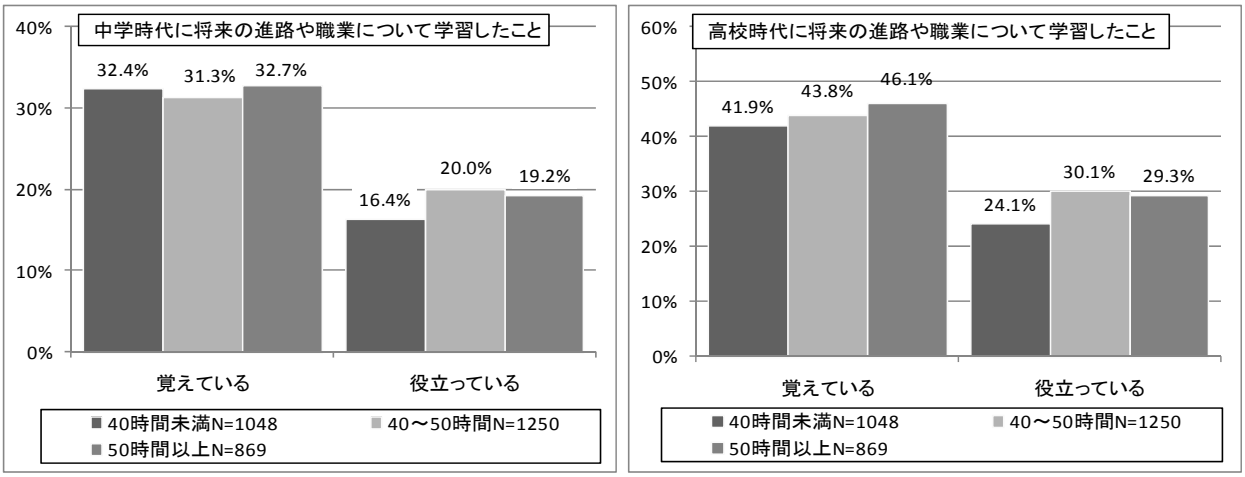
図表４－３　現在の仕事上の立場別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

		正規就労自営 N=238	非正規就労 N=827	主婦 N=430	無業その他 N=268
中学	ボラティアなどの体験活動	33.8%	30.1%	30.7%	22.0%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	9.7%	12.7%	13.7%	16.0%
高校	職場体験学習やインターンシップ	10.4%	13.7%	16.0%	10.4%
	進路に関する二者面談や三者面談	81.4%	79.8%	80.2%	71.6%
	進路に関する個別相談やカウンセリング	41.3%	43.7%	44.0%	32.1%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	22.7%	28.3%	36.5%	24.3%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	15.2%	17.9%	22.6%	13.8%
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	13.8%	16.3%	19.5%	11.6%
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	6.7%	8.6%	11.2%	8.6%
大学	職業興味や職業適性などの検査	48.2%	39.4%	35.3%	32.1%
	自分の性格を理解するための検査	47.4%	35.9%	31.4%	32.8%
	職業や仕事を調べる授業	23.6%	19.3%	18.4%	14.6%
	職場体験学習やインターンシップ	34.1%	25.0%	26.3%	21.3%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	51.6%	45.2%	37.9%	37.7%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	53.0%	44.5%	38.1%	37.3%
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	23.7%	19.0%	14.9%	19.4%

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

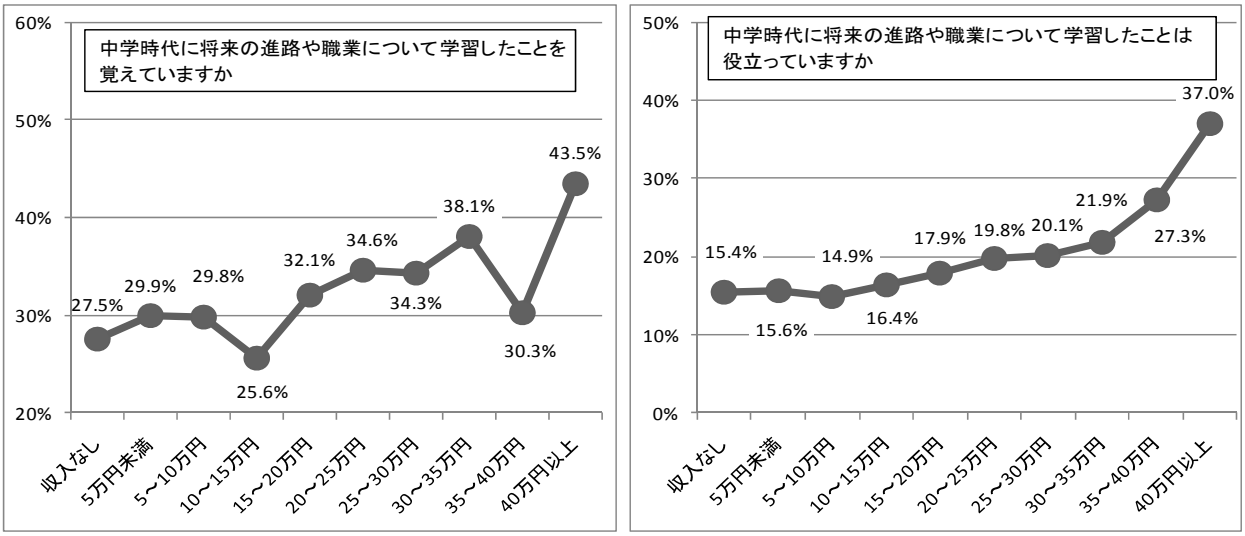
2. 平均労働時間・平均収入別の学校時代のキャリア教育の評価

図表４－４には、１週間あたりの平均労働時間別にみた学校時代のキャリア教育の評価を示した。「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」については特に目立った差はみられなかったが、「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」では労働時間が長いほど「覚えている」「役立っている」割合が高いようであった。ただし、統計的に有意なのは「役立っている」割合のみであり、労働時間が「40 時間未満」と短い者で特に「役立っている」と回答する割合が低かった。

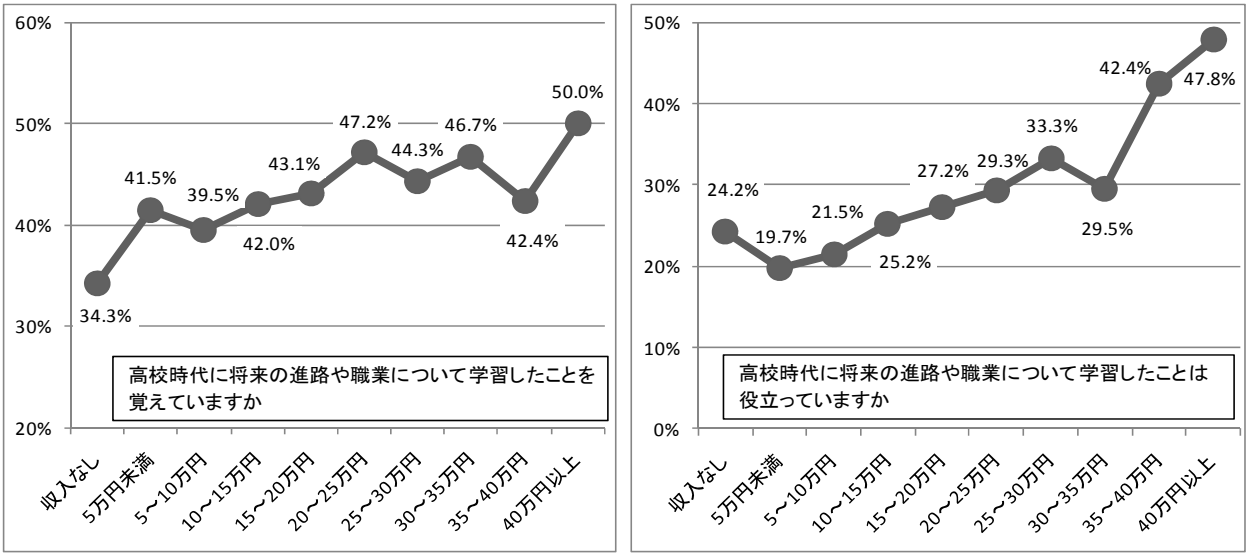


図表４－４　１週間あたりの平均労働時間別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表４－５および図表４－６には、１ヶ月の平均収入別にみた学校時代のキャリア教育の評価を示した。「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」ともに、概して言えば、収入が高いほど「覚えている」「役立っている」と回答する割合が高かった。



図表４－５　1ヶ月の平均収入別にみた中学時代のキャリア教育の評価



図表４－６　1ヶ月の平均収入別にみた高校時代のキャリア教育の評価

１ヶ月の平均収入で学校時代のキャリア教育の評価に違いがみられたので、図表４－７では、１ヶ月の平均収入別に学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。１ヶ月の平均収入が相対的に少ない「15 万円未満」、平均的な「15～25 万円」、相対的に多い「25 万円以上」に群分けをして比較した。

図表４－７　1ヶ月の平均収入別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

		15万円未満 N=1355	15～25万円 N=1982	25万円以上 N=547
中学	職場体験学習やインターンシップ	29.6%	25.3%	21.8%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	13.9%	9.4%	11.3%
高校	職業興味や職業適性などの検査	35.6%	33.5%	27.6%
	職場体験学習やインターンシップ	14.1%	10.5%	10.1%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	32.5%	22.6%	18.8%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	20.1%	14.8%	13.5%
大学	職業興味や職業適性などの検査	37.2%	48.4%	44.8%
	自分の性格を理解するための検査	34.2%	48.4%	41.3%
	職業や仕事を調べる授業	18.2%	23.3%	23.6%
	職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業	16.2%	18.8%	22.5%
	職場体験学習やインターンシップ	24.9%	32.0%	39.5%
	進路に関する個別相談やカウンセリング	26.7%	32.1%	24.5%
	進路の目標や計画を考える授業	16.3%	20.6%	16.8%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	42.4%	53.8%	39.9%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	41.6%	54.6%	43.3%
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	31.4%	34.8%	27.2%
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	17.8%	23.4%	23.9%

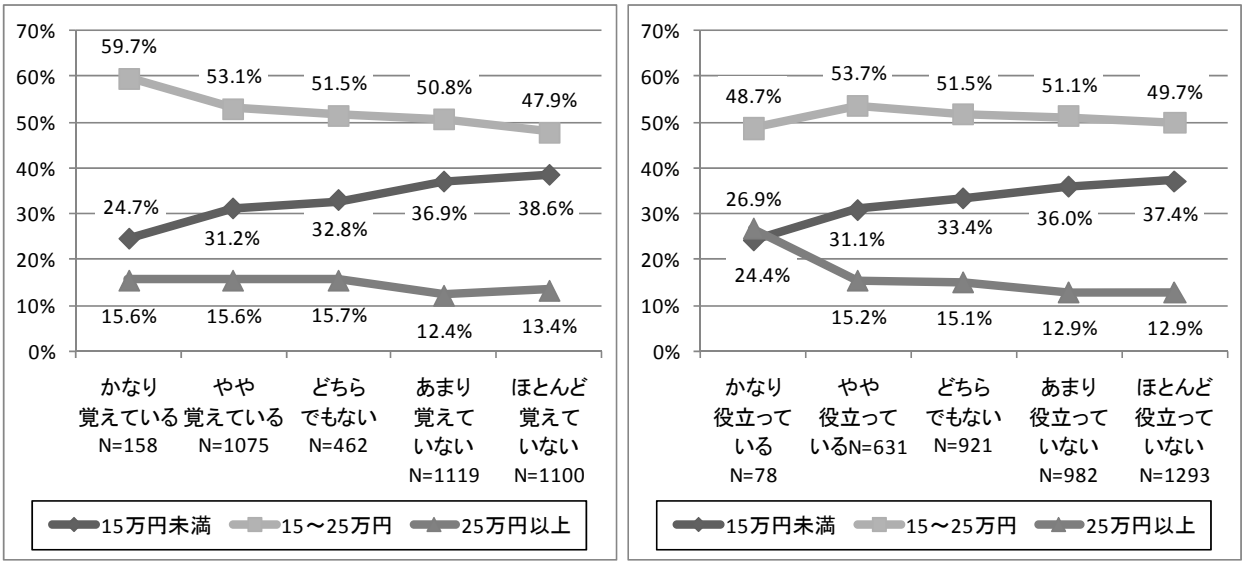
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

その結果、収入が少ない「15 万円未満」では、おもに中学・高校時代に行った授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。特に「職場体験学習やインターンシップ」「履歴書

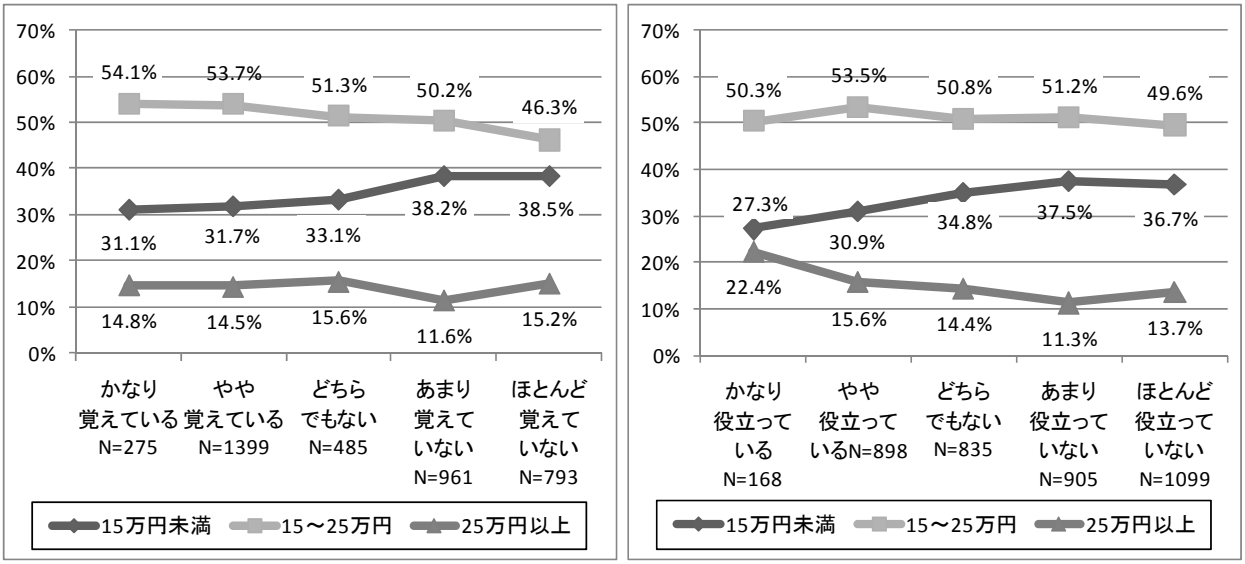
の書き方や面接試験の練習」は、中学・高校ともに記憶にあるという回答が多かった。一方、収入が平均的な「15～25 万円」では、おもに大学時代に行った授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。なお、収入が高い「25 万円以上」の者は大学時代の、特に「職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業」「職場体験学習やインターンシップ」を記憶があるとする割合が高かった。

図表４－８および図表４－９には、先に図表４－５および図表４－６で示した結果を、縦軸と横軸を逆にしてグラフに示した。すなわち、先には調査で行った実際の聞き方をふまえて収入別に学校時代のキャリア教育に対する評価をみた。ここでは、その順序を逆にして、仮に中学時代・高校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」ということが、いかにその後の収入に影響を与えるのかという観点から解釈することができるとすれば、どのような結果がみられるのかを示した。図表４－８および図表４－９に共通して、中学時代・高校時代のキャリア教育を「覚えている」ほど「15～25 万円」の者が増え、「15 万円未満」の者が減ることが示された。また、中学時代・高校時代のキャリア教育が「役立っている」ほど「15 万円未満」の者が減り、「15～25 万円」および「25 万円以上」の者が増えることが示された。

これらの結果から、学校時代のキャリア教育をよく覚えている者ほど、また役立っている者ほど収入が高いと単純には結論づけられないものの、ここまでの一連の結果を重ね合わせて解釈すると、学校時代のキャリア教育と現在の収入の間には一定の関連性があることは言えるものと思われる。キャリア教育に積極的に取り組み、後にキャリア教育の記憶が残るほど、または後にキャリア教育は現在の職業生活に有益であると思えるほどにキャリア教育に影響を受けることが、何らかの形で現在の収入と結びついているという点は１つの知見として考えておいて良いと思われる。



図表４－８　中学時代のキャリア教育の評価別にみた1ヶ月の平均収入



図表４－９　高校時代のキャリア教育の評価別にみた1ヶ月の平均収入

３. 現在の勤務先の業種別・職業別の学校時代のキャリア教育の評価

(1)現在の勤務先の業種別にみた学校時代のキャリア教育の評価

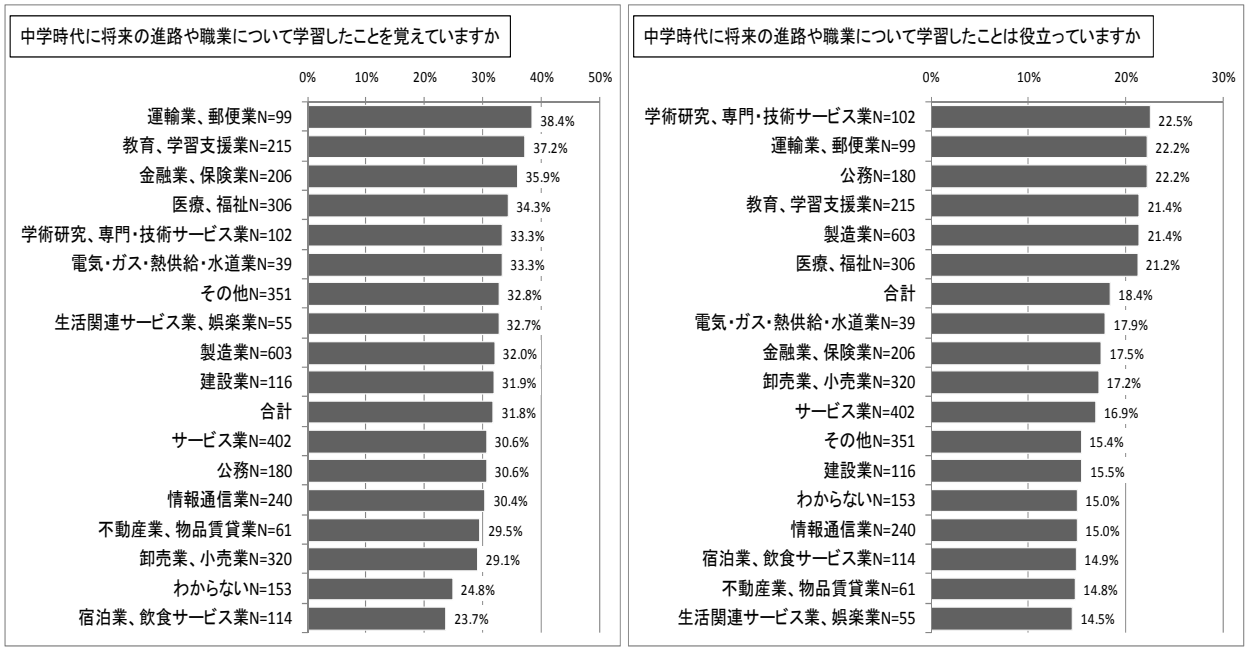
図表４－１０および図表４－１１には、現在の勤務先の業種別に学校時代のキャリア教育の評価を集計した結果を示した。図中の数値は「かなり覚えている＋やや覚えている」または「かなり役立っている＋やや役立っている」の割合である。

図のうち、全体の合計よりも上回っている業種に注目すると、「中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」の「覚えている」「役立っている」のいずれの設問にもみられるのは「運輸業、郵便業」「教育、学習支援業」「医療、福祉」「製造業」であった。その他、「役立っている」という評価に関して言えば、「学術研究、専門・技術サービス業」「公務」も中学時代・高校時代のキャリア教育に共通して高い値を示していた。

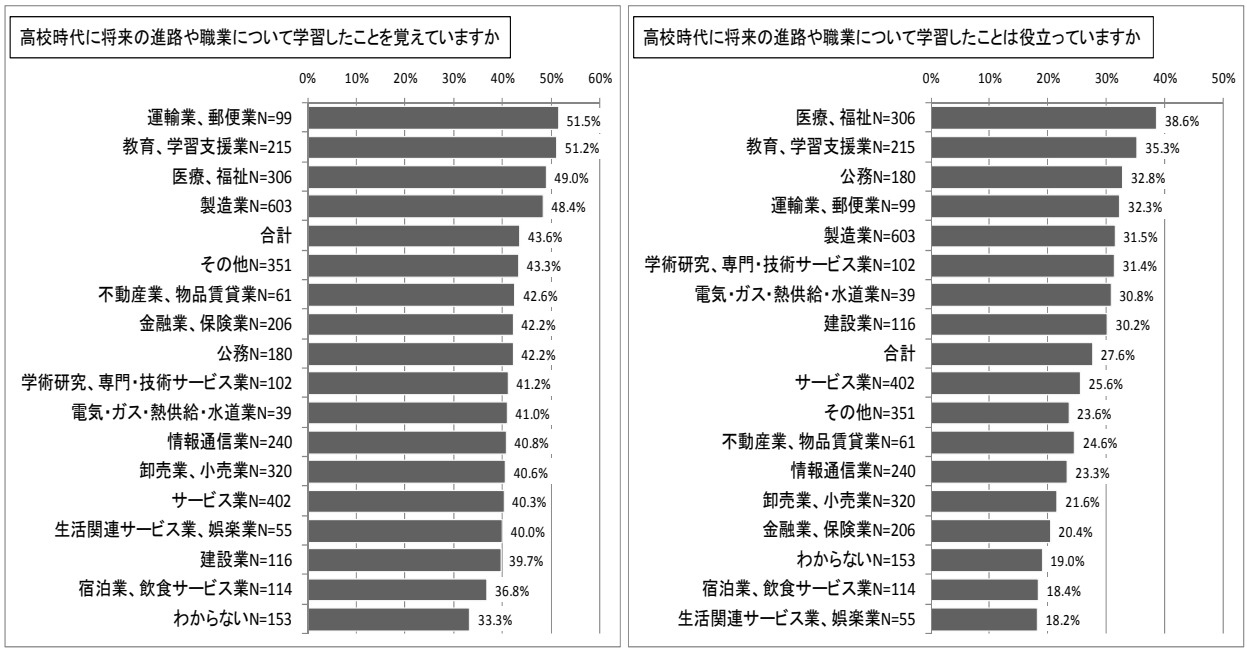
ただし、図表４－１０および図表４－１１のうち、全体として統計的に有意な表は高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」が「役立っている」割合についてのみであり、概して言えば、現在の勤務先の業種で学校時代のキャリア教育の評価が異なるとは言え、それほど明確な違いではないことも付記しておきたい。

なお、図表４－１２には、現在の勤務先の業種別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。業種と特に関連がみられたもののみ表に示した。その結果、大まかに、①「医療、福祉」では、中学・高校・大学の全般で職業調べや職場体験・インターンシップ・ボランティア、履歴書の書き方や就職活動の進め方などの授業が記憶にあるという割合が高かった。②「教育、学習支援業」では、中学の職業調べ、大学の職場体験・インターンシップ・ボランティア、就職活動の進め方や試験対策などの授業が記憶にあるという割合が高かった。③「宿泊業飲食サービス業」「生活関連サービス業、娯楽業」「その他」では、

特に高校時代の職場体験・インターンシップ・ボランティア、就職活動の進め方などの授業が記憶にあるという割合が高かった。④「製造業」「情報通信業」「運輸業・郵便業」「金融業・保険業」では、大学時代の職業興味検査・職業適性検査・性格検査のような自己理解を促す授業が記憶にあるという割合が高かった。



図表４－１０　現在の勤務先の業種別にみた中学時代のキャリア教育の評価



図表４－１１　現在の勤務先の業種別にみた高校時代のキャリア教育の評価

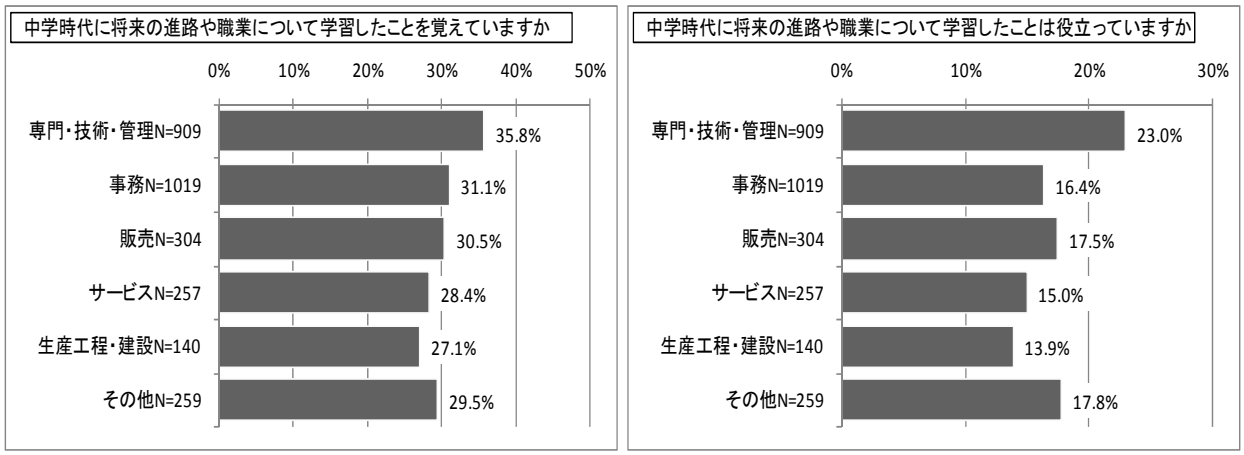
図表４－１２　現在の勤務先の業種別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

		建設業 N=116	製造業 N=603	情報通信業 N=240	運輸業郵便業 N=99	金融業保険業 N=206	宿泊業飲食サービス業 N=114	生活関連サービス業、娯楽業 N=55	教育、学習支援業 N=215	医療、福祉 N=306	サービス業 N=402	その他 N=351	わからない N=153	合計
中学	職業や仕事を調べる授業								42.3%	37.6%				31.3%
高校	職場体験学習やインターンシップ									16.7%		15.7%		11.5%
	ボランティアなどの体験活動		16.1%					36.4%		29.4%		24.5%		20.4%
	履歴書の書き方や面接試験の練習					9.7%	33.3%		15.8%	31.0%		32.8%		24.9%
	就職活動の進め方や試験対策の授業			11.3%		6.3%	22.8%		10.4%	23.5%				16.1%
大学	職業興味や職業適性などの検査		49.1%	52.1%	58.6%	60.2%	29.8%			38.6%		37.9%	33.3%	44.7%
	自分の性格を理解するための検査		48.4%	50.0%		59.2%	26.3%					34.2%	29.4%	43.3%
	職場体験学習やインターンシップ		35.5%						38.1%	37.9%		25.9%	20.9%	31.2%
	ボランティアなどの体験活動	6.9%	11.1%						32.1%	27.1%				
	履歴書の書き方や面接試験の練習					62.6%							32.0%	48.7%
	就職活動の進め方や試験対策の授業					64.1%	33.3%		57.7%	60.8%	45.0%	43.0%	38.6%	49.7%

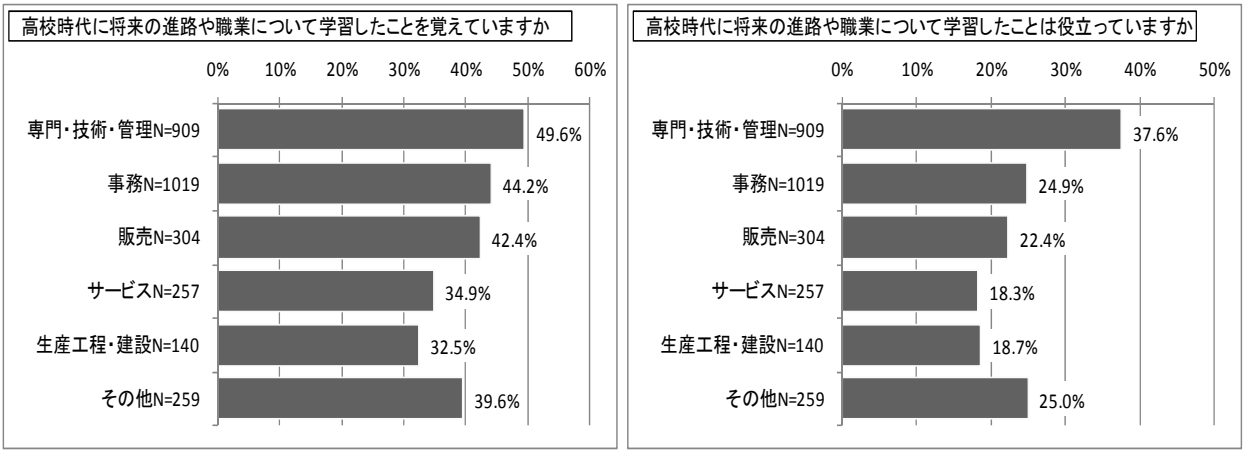
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

(2)現在の勤務先の職種別にいた学校時代のキャリア教育の評価

図表４－１３および図表４－１４に、現在の職種別にみた学校時代のキャリア教育の評価を示した。図中の数値は「かなり覚えている＋やや覚えている」または「かなり役立っている＋やや役立っている」の割合である。中学時代に将来の進路や職業について学習したこと」「高校時代に将来の進路や職業について学習したこと」の「覚えている」「役立っている」のいずれの設問についても結果は同じであり、現在の職業が「専門・技術・管理」の者が学校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」と回答する割合が高い。一方で、「サービス」「生産工程・建設」では学校時代のキャリア教育に対する評価が低かった。



図表４－１３　現在の勤務先の職種別にみた中学時代のキャリア教育の評価



図表４－14　現在の勤務先の職種別にみた高校時代のキャリア教育の評価

図表４－１５に、現在の勤務先の職種別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。表から、①「生産工程・建設」「その他」では、高校時代の履歴書の書き方や就職活動の進め方の授業が記憶にあるという割合が高かった、②「専門・技術・管理」「事務」「販売」では、大学時代の職業興味検査・職業適性検査・性格検査が記憶にあるという割合が高かった。その他、「専門・技術・管理」「事務」では履歴書の書き方や就職活動の進め方なども記憶にあるとする割合が高かった。

図表４－１５　現在の勤務先の職種別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

		専門・技術・管理 N=909	事務 N=1019	販売 N=304	サービス N=257	生産工程・建設 N=140	その他 N=259
高校	職場体験学習やインターンシップ	11.6%	9.8%	8.3%	13.8%	18.7%	13.5%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	23.9%	21.0%	23.0%	26.9%	37.3%	30.8%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	15.2%	13.1%	16.9%	17.1%	27.1%	19.7%
大学	職業興味や職業適性などの検査	46.7%	47.9%	50.1%	36.4%	33.1%	39.2%
	自分の性格を理解するための検査	46.8%	47.6%	49.3%	33.6%	27.7%	34.0%
	職場体験学習やインターンシップ	38.8%	28.7%	34.1%	26.6%	15.7%	27.2%
	ボランティアなどの体験活動	17.3%	16.0%	14.7%	15.9%	4.8%	16.5%
	進路に関する二者面談や三者面談	22.7%	15.5%	16.6%	15.9%	19.9%	17.3%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	51.4%	53.3%	51.8%	45.3%	31.9%	38.6%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	52.5%	53.9%	53.2%	43.4%	34.9%	41.3%
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	32.9%	34.6%	35.5%	34.9%	19.9%	29.3%
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	20.1%	26.7%	23.0%	21.1%	10.8%	21.0%

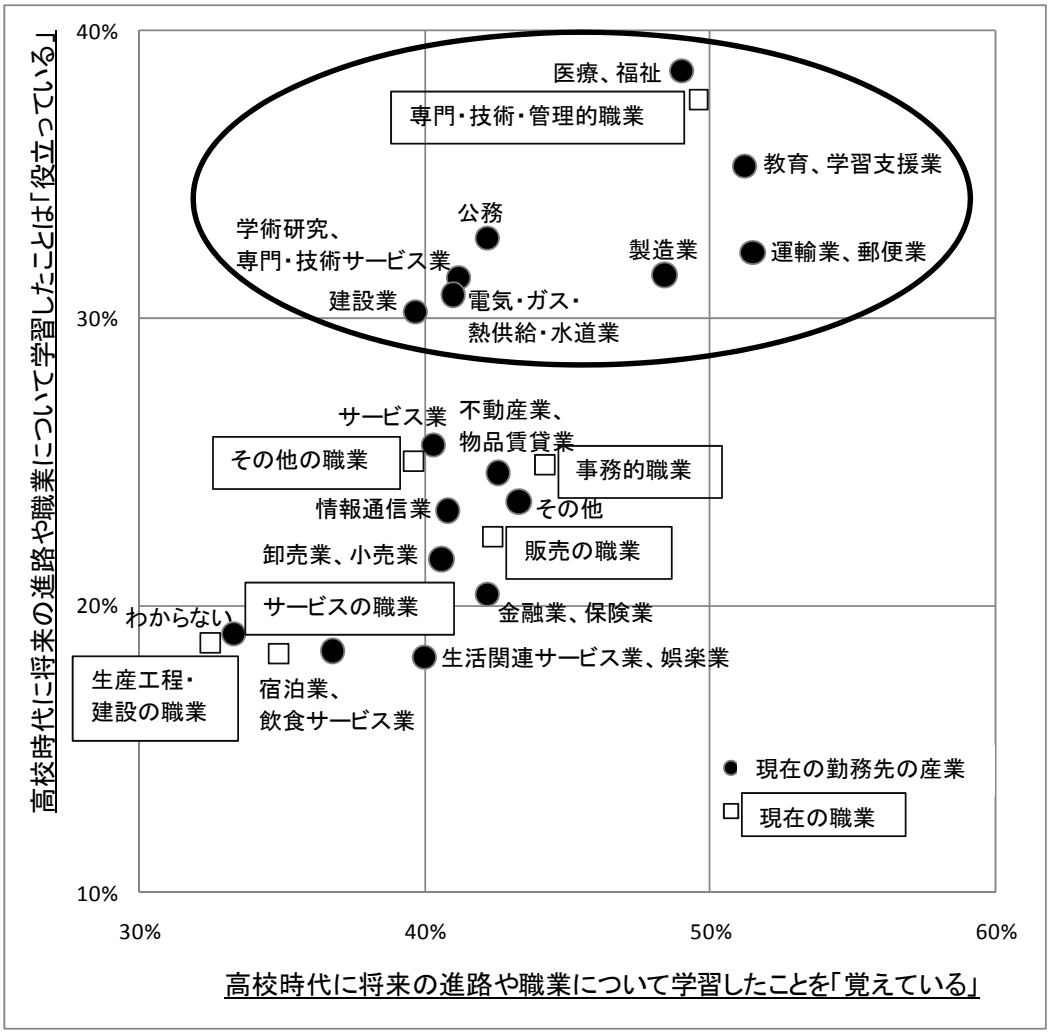
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

(3)現在の勤務先の業種別・職業別の学校時代のキャリア教育の評価

図表４－１６に、業種別・職業別の傾向が特に顕著であった高校時代のキャリア教育の評価についてまとめた。図表４－１６は横軸が「高校時代に進路や職業について学習したこと」を「覚えている」割合、縦軸が同じく「役立っている」割合とし、各業種・職業の割合をプロットしたものである。図から、高校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」

の双方が高い割合を示すのは「教育、学習支援業」「運輸業、郵便業」であることが分かる。それ以外に「役立っている」と回答した割合が高かった業種として「医療、福祉」「製造業」「公務」「学術研究、専門・技術サービス」「電気・ガス・熱供給・水道業」「建設業」、職業としては「専門・技術・管理的職業」があった（図中、丸で囲んだ部分を参照のこと）。一方、「役立っている」「覚えている」の双方が低い割合を示した業種は「宿泊業、飲食サービス業」「（業種は）分からない」、職業は「サービスの職業」「生産工程・建設の職業」があった。

以上の結果から、①概して言えば、専門的・技術的な知識やスキルを要する業種・職業で高校時代のキャリア教育に対する評価が高い、②サービスの職業、生産工程・建設などの職業ではキャリア教育に対する評価が低いということが言える。



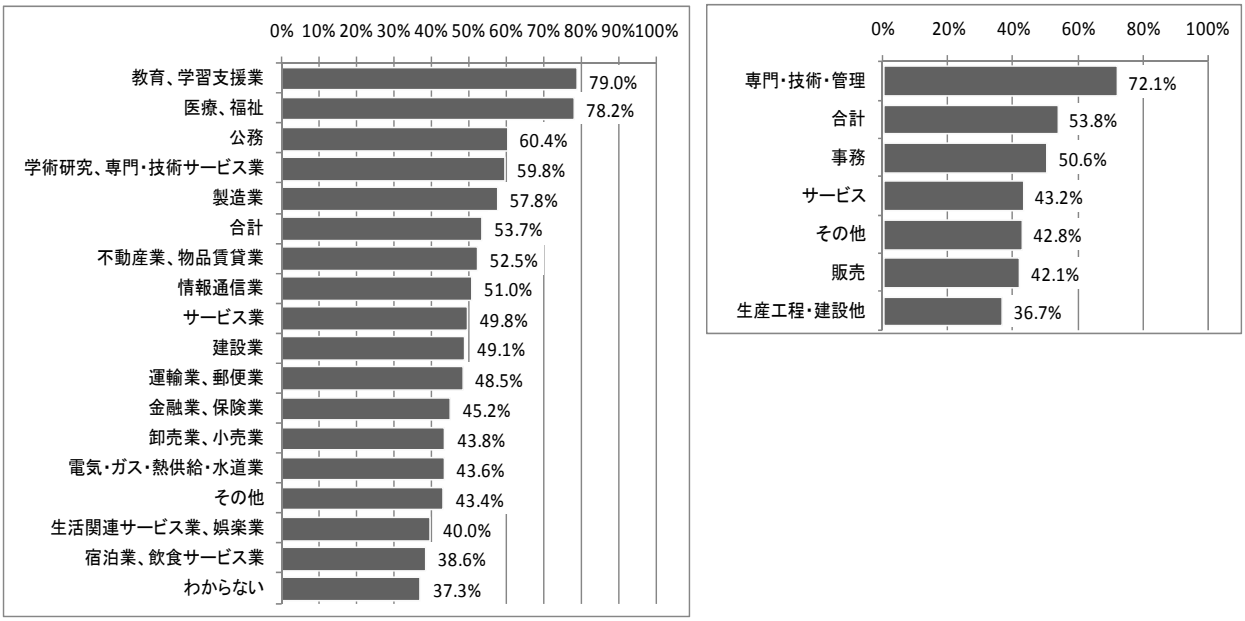
図表４－１６　業種別・職種別の高校時代のキャリア教育の評価（まとめ）

図表４－１７には業種別・職業別に学校時代に学んだ知識がどの程度、今の仕事に役立っているかを示したが、もともとここで挙がった業種・職種は、キャリア教育のみならず、学校時代の知識全般が職業と結びついている業種・職業であるとも言える。学校時代に学んだ

知識と現在の職業との関連性が高いということがキャリア教育の評価の高さにも派生して広がっていると解釈することができるであろう。

ただし、高校時代のキャリア教育が「役立っている」という評価が高かった業種として「製造業」「建設業」などがみられ、総じてサービス業では「役立っている」という評価がなされなかったことからは、キャリア教育の評価のまた違った側面が垣間見られる。これについては、キャリア教育の評価が、現在、対人的な職業についている者よりは対物的な職業についている者で高いという解釈もできよう。

また、他章（補章「学校時代のキャリア教育と地方の教育・労働指標との関連」）では、高校のキャリア教育が「役立っている」という印象は、第２次産業就業者比率が高い土地柄とも関連している可能性が示されている。この点からは、第２次産業の盛んな地域では、実際の職場に結びつきやすい形でキャリア教育に取り組みやすく、結果的に、大人になってからそうした産業に関わる仕事に就いた際に「役立った」という印象をもたれやすいという可能性もある。ただし、この点については様々な解釈が考えられるので、今後の課題としておきたい。



図表４－１７　業種別・職種別にみた学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っている程度

４. 現在の就労状況による学校時代のキャリア教育の評価の違い

本章のまとめとして、ここまで分析を行ってきた回答者の現在の職業生活に関連する各属性別の学校時代のキャリア教育の評価を１つの表に集約して示す。図表４－１８には、学校時代のキャリア教育の評価が高い属性から順に表に並べた。なお、前章で分析した学校卒業後からこれまでのキャリアについても、あわせて表にして解釈することとした。

図表４－１８には、中学時代・高校時代のキャリア教育を「覚えている」または「役立っ

ている」と回答した割合の高かった上位 15 属性を示した。この表のうち、どの設問についても上位 15 位までに含まれる属性に網かけを付して解釈を行った。その結果、どの設問でも概して上位に含まれる属性として、①現在の収入「40 万円以上」、②現在の収入「30～35 万円」、③勤務先の業種「運輸業、郵便業」、④勤務先の業種「教育、学習支援業」、⑤勤務先の業種「医療、福祉」、⑥現在の職業「専門・技術・管理」、⑦非正社員経験０年の７つの属性が挙がった。これらをまとめると、概して言えば、35 万円以上の比較的高い収入があり、運輸業、郵便業、教育・学習支援業、医療、福祉などの業種に勤務し、専門的・技術的・管理的職業に就いている者、非正社員経験のない者で、学校時代のキャリア教育に対する評価が高かった。

図表４－１８　学校時代のキャリア教育の評価が高い属性（上位 15 属性）

中学時代のキャリア教育を「覚えている」上位15属性		中学時代のキャリア教育が「役立っている」上位15属性	
現在の収入「40万円以上」	43.5%	現在の収入「40万円以上」	37.0%
勤務先の業種「運輸業、郵便業」	38.4%	現在の収入「35～40万円」	27.3%
現在の収入「30～35万円」	38.1%	現在の職業「専門・技術・管理」	23.0%
勤務先の業種「教育、学習支援業」	37.2%	勤務先の業種「学術研究、専門・技術サービス業」	22.5%
勤務先の業種「金融業、保険業」	35.9%	勤務先の業種「運輸業、郵便業」	22.2%
現在の職業「専門・技術・管理」	35.8%	勤務先の業種「公務」	22.2%
現在の仕事上の立場「自営業・自由業」	34.8%	現在の収入「30～35万円」	21.9%
正社員・非正社員ともに経験なし	34.7%	勤務先の業種「教育、学習支援業」	21.4%
現在の収入「20～25万円」	34.6%	勤務先の業種「製造業」	21.4%
現在の収入「25～30万円」	34.3%	勤務先の業種「医療、福祉」	21.2%
勤務先の業種「医療、福祉」	34.3%	正社員経験3年以上	20.6%
非正社員経験0年	34.1%	非正社員経験0年	20.4%
正社員経験3年未満	34.0%	転職経験あり１回	20.2%
最終学歴「大学・大学院」	33.9%	現在の収入「25～30万円」	20.1%
現在の仕事上の立場「正社員・正職員」	33.9%	週平均労働時間「40～50時間」	20.0%
高校時代のキャリア教育を「覚えている」上位15属性		**高校時代のキャリア教育が「役立っている」上位15属性**	
勤務先の業種「運輸業、郵便業」	51.5%	現在の収入「40万円以上」	47.8%
勤務先の業種「教育、学習支援業」	51.2%	現在の収入「35～40万円」	42.4%
現在の収入「40万円以上」	50.0%	勤務先の業種「医療、福祉」	38.6%
現在の職業「専門・技術・管理」	49.6%	現在の職業「専門・技術・管理」	37.6%
勤務先の業種「医療、福祉」	49.0%	勤務先の業種「教育、学習支援業」	35.3%
勤務先の業種「製造業」	48.4%	現在の収入「25～30万円」	33.3%
現在の収入「20～25万円」	47.2%	正社員経験3年以上	32.8%
現在の収入「30～35万円」	46.7%	勤務先の業種「公務」	32.8%
現在の仕事上の立場「正社員・正職員」	46.5%	勤務先の業種「運輸業、郵便業」	32.3%
非正社員経験0年	46.4%	勤務先の業種「製造業」	31.5%
週平均労働時間「50時間以上」	46.1%	勤務先の業種「学術研究、専門・技術サービス業」	31.4%
卒業直後の就労形態「正社員・正職員」	45.5%	最終学歴「高校」	31.2%
正社員経験3年未満	45.3%	勤務先の業種「電気・ガス・熱供給・水道業」	30.8%
転職経験なし	45.1%	非正社員経験0年	30.6%
最終学歴「大学・大学院」	45.0%	現在の仕事上の立場「正社員・正職員」	30.5%

※どの設問についても上位15位までに入る属性に網かけを付した。

図表４－１９では、逆に、中学時代・高校時代のキャリア教育を「覚えている」または「役立っている」と回答した割合の低かった下位 15 属性を示した。この表のうち、どの設問についても下位 15 位までに含まれる属性に網かけを付して解釈を行った。その結果、どの設問でも概して下位に含まれる属性として、①現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」、②現

在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」、③現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」、④卒業直後の就労形態「無業」、⑤非正社員経験のみあり、⑥現在の職業「生産工程・建設」の６つの属性が挙がった。これらをまとめると、現在、無業または求職中であるか、パート・アルバイトとして働いている場合、学校卒業直後の就労形態が無業で非正社員経験しかない場合、現在の職業が生産工程・建設である場合に、概して言えば学校時代のキャリア教育の評価が低かった。

図表４－１９ 学校時代のキャリア教育の評価が低い属性

中学時代のキャリア教育を「覚えている」下位15属性		中学時代のキャリア教育が「役立っている」下位15属性	
現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」	15.5%	現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」	2.6%
卒業直後の就労形態「無業」	21.8%	現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」	8.2%
勤務先の業種「宿泊業、飲食サービス業」	23.7%	転職経験あり４回	10.3%
現在の仕事上の立場「派遣社員」	24.4%	卒業直後の就労形態「無業」	11.6%
勤務先の業種「わからない」	24.8%	現在の仕事上の立場「家族従業員」	12.0%
転職経験あり３回	25.1%	転職経験あり３回	12.6%
最終学歴「高校」	25.2%	現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」	12.6%
非正社員3年以上	25.2%	非正社員経験のみあり	13.2%
現在の収入「10～15万円」	25.6%	正社員経験0年	13.3%
現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」	26.1%	非正社員3年以上	13.3%
現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」	26.5%	正社員・非正社員ともに経験なし	13.3%
現在の職業「生産工程・建設」	27.1%	現在の職業「生産工程・建設」	13.9%
非正社員経験のみあり	27.3%	勤務先の業種「生活関連サービス業、娯楽業」	14.5%
現在の収入「なし」	27.5%	卒業直後の就労形態「非正社員・非正職員」	14.7%
転職経験あり４回	27.7%	非正社員経験3年未満	14.7%
高校時代のキャリア教育を「覚えている」下位15属性		**高校時代のキャリア教育が「役立っている」下位15属性**	
現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」	18.4%	現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」	5.3%
現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」	29.1%	現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」	11.9%
卒業直後の就労形態「無業」	31.5%	卒業直後の就労形態「無業」	13.9%
現在の職業「生産工程・建設」	32.5%	現在の仕事上の立場「家族従業員」	16.0%
勤務先の業種「わからない」	33.3%	正社員・非正社員ともに経験なし	17.3%
現在の収入「なし」	34.3%	勤務先の業種「生活関連サービス業、娯楽業」	18.2%
現在の仕事上の立場「派遣社員」	34.8%	現在の職業「サービス」	18.3%
現在の職業「サービス」	34.9%	勤務先の業種「宿泊業、飲食サービス業」	18.4%
非正社員3年以上	35.0%	現在の職業「生産工程・建設」	18.7%
非正社員経験のみあり	36.3%	勤務先の業種「わからない」	19.0%
最終学歴「高校」	36.6%	現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」	19.0%
正社員経験0年	36.6%	現在の収入「5万円未満」	19.7%
勤務先の業種「宿泊業、飲食サービス業」	36.8%	正社員経験0年	20.1%
卒業直後の就労形態「非正社員・非正職員」	37.6%	非正社員経験のみあり	20.3%
現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」	37.8%	勤務先の業種「金融業、保険業」	20.4%

※どの設問についても下位15位までに入る属性に網かけを付した。

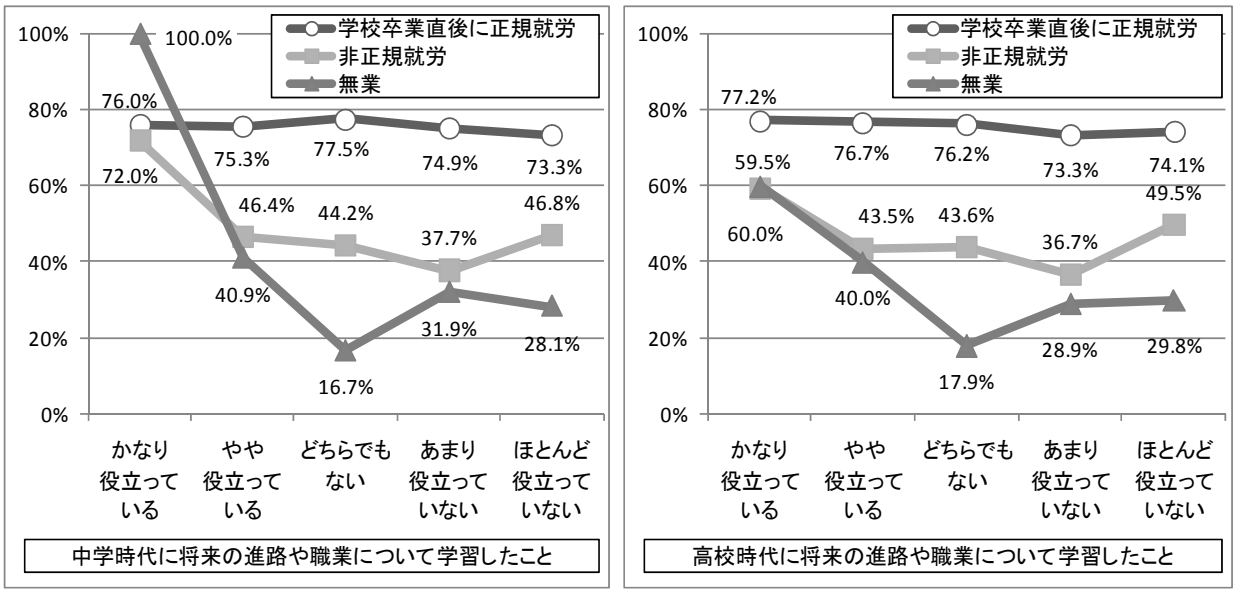
５．本章の結果のまとめと示唆

ここまでの結果をもとに、以下の３点が示唆される。

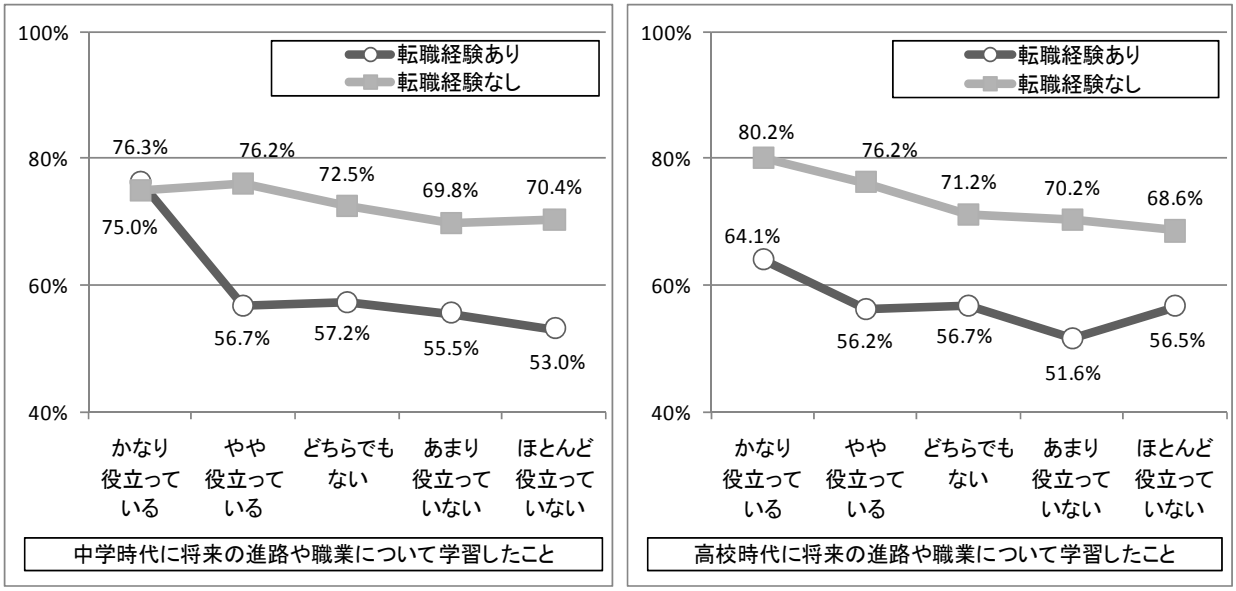
第一に、この調査の結果に限って言えば、学校時代のキャリア教育は、教育や医療、運輸や郵便などの業種で、専門的・技術的・管理的な職業に従事する非正規就労経験がない高収入の者にとって記憶に残り、かつ有益であったと捉えられやすい。それに対して、無業、求職者、非正規就労の状態にある者、非正規就労の経験しかなく、生産工程や建設の業界で働く者にとっては、学校時代のキャリア教育は記憶に残らず、役立っているとは思われていな

い。すなわち、「直線的」で「恵まれた」キャリアを歩んできた者にとってキャリア教育は効果的であり、「直線的」ではなく十分に「恵まれた」とは言えないキャリアを歩んできた者にとってキャリア教育は効果的であるとは解釈しにくい結果となった。こうした結果を、逆の観点からみれば、学校時代のキャリア教育をよく覚えていて、よく学んだ者は、現在、「直線的」で「恵まれた」キャリアを歩んでいるとする解釈ができる。その場合、学校のキャリア教育は将来の若者の職業生活に大きな影響を与える重要な要因であり、それゆえ、学校のキャリア教育の環境をよりいっそう整備し、キャリア教育から多くを学べる若者を増やすべきであるとする示唆が引き出せることとなろう。

第二に、しかしながら、本章までの結果は、むしろ、無業者、求職者、非正規就労者に対して、より有益に感じられるようなキャリア形成支援を何らかの形で提供する必要性を示唆するものであると考えられる。望ましくは、いわゆる「直線的」ではなく「恵まれた」とは言えない期間があったとしても、長期的には、主体的にキャリアを形成し、充実した職業生活を送るための基礎となるようなキャリア教育が学校段階で施されるべきである。労働行政としては、そのために、学校教育段階のキャリア教育に対する手厚い側面的なサポートを提供することが重要となろう。事実、図表４－２０～図表４－２２に示したとおり、「直線的」でないキャリアを歩んだ若者でも、学校時代のキャリア教育に対する評価が良い場合には一定以上の収入を得ることができると解釈できる結果もみられた。

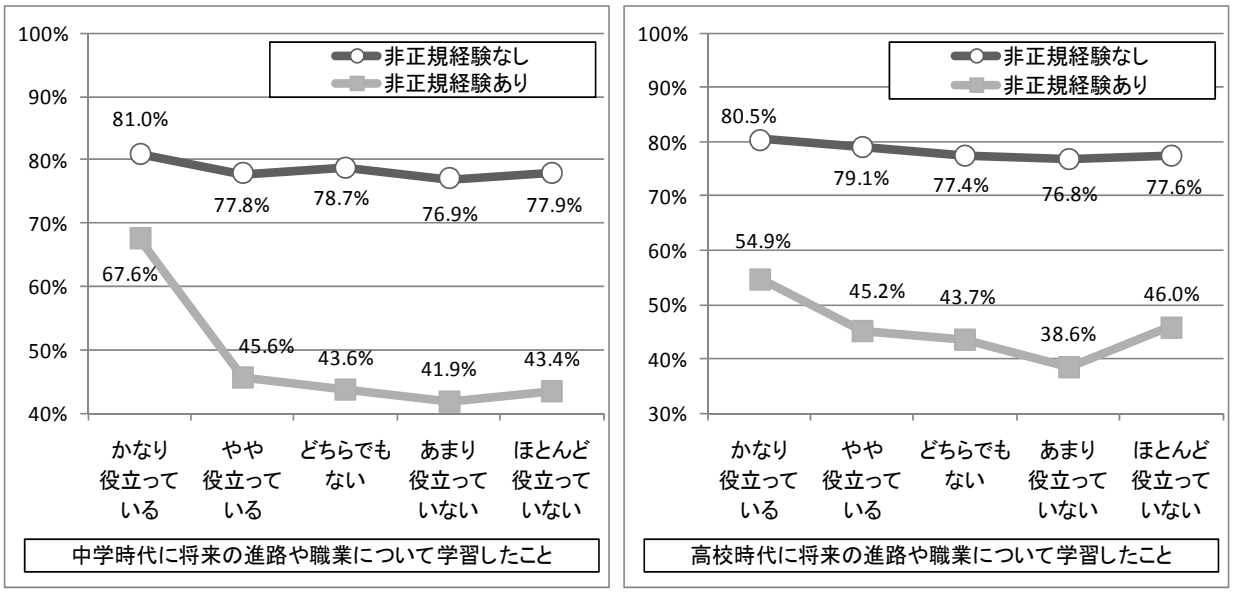


図表４－20　学校卒業直後の働き方および学校時代のキャリア教育の評価別にみた1ヶ月の平均収入が 15 万円以上の者の割合



図表４－２１　転職の有無および学校時代のキャリア教育の評価別にみた

1ヶ月の平均収入が 15 万円以上の者の割合



図表４－２２　非正規就労経験および学校時代のキャリア教育の評価別にみた

1ヶ月の平均収入が 15 万円以上の者の割合

第三に、ただし、本調査の結果で示されるとおり、概して言えば、「直線的」ではなく「恵まれた」とは言えないキャリアを歩む者は、学校におけるキャリア教育の取り組みから多くを学ぶことができていない場合が多い。ここから得られる示唆とは、こうした層の若者が学校から離れた場合には、学校で本来受けるべきであったキャリア教育的な支援介入を、学校外の労働行政関連機関において何らかの形で行うことであろうと思われる。そうした言わば「リメディアル（remedial：補習的・治療的）なキャリア教育的な支援（Brown Lent,1996；

Lent,2005)」を学校外の機関で行える体制・仕組みの整備の検討が必要となろう。具体的には、これまで学校教育現場では軽視されがちであった履歴書の書き方、面接の受け方、就職活動の進め方といった求職活動に必須な「手続き的な知識」を、学校外で学習できるような側面的な支援などが考えられる。その場合、現在あるジョブカードの支援体制の枠組みやその具体的な担い手としてのキャリア・コンサルタントは、こうした学校外のキャリア教育・キャリアガイダンスの提供の枠組みを模索するにあたっての重要なリソースとなる。また、キャリア・コンサルタントの介入方策として個別支援のみならず、セミナーやガイダンスといったグループ支援などの可能性も模索できるものと思われる。

【引用文献】

Brown, S. D. 1996　A social cognitive framework for career choice counseling.　Career Development Quarterly, 44,354-366.

Lent,R. W. 2005　A social cognitive view of career　development and counseling. In D.Brown & R.W.Lent(Eds.), Career Development and Counseling: Putting theory and research to work.(pp.101-127).Hoboken, NJ: Wiley.

第5章　学校時代のキャリア教育と現在の就労意識との関連

1. 職業生活に対する満足感と学校時代のキャリア教育の評価との関連

図表５－１に、現在の就労意識と学校時代のキャリア教育の評価との関連を示した。表から、「現在の生活全般に、どの程度、満足していますか」「これまでの職業生活に、どの程度、満足していますか」「将来の目標や自分のやりたいことが、どの程度、明確ですか」「自尊心（自己評価）」などとは、総じて、統計的に有意な相関係数が示された。特に、高校時代のキャリア教育が「役立っている」とする評価と現在の生活全般の満足感および職業生活に対する満足感は最も高い相関係数がみられた。現状に対する満足感と学校時代のキャリア教育の評価は密接に関連していることが示される。

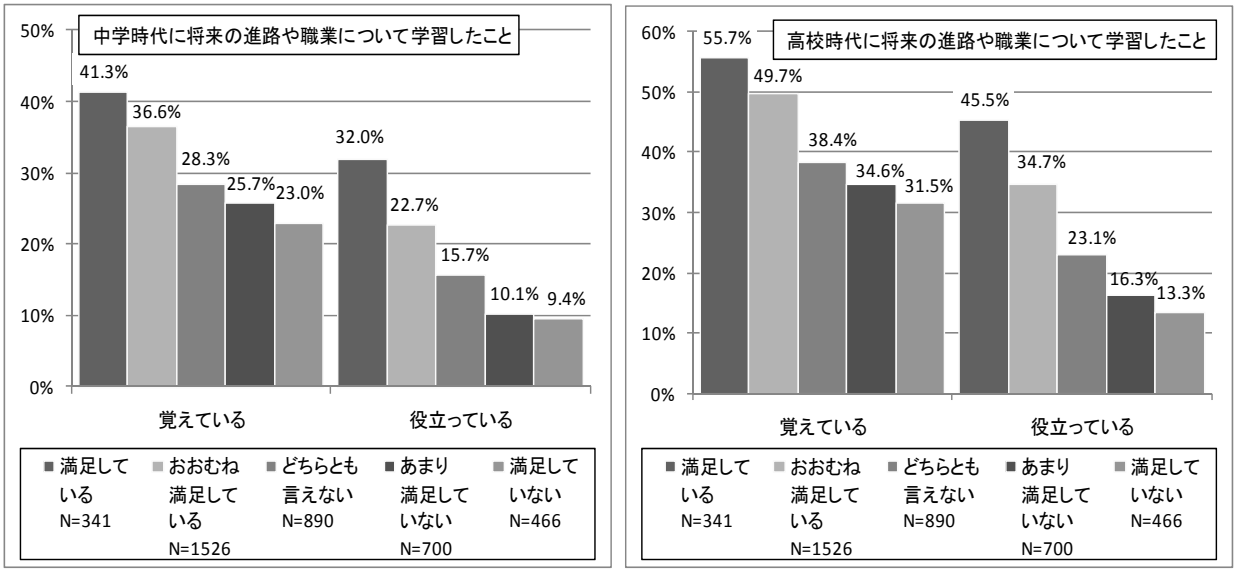
図表５－１　現在の就労意識と学校時代のキャリア教育の評価の関連

	中学時代		高校時代	
	覚えている	役立っている	覚えている	役立っている
現在の生活全般に、どの程度、満足していますか	.120	.172	.147	.200
これまでの職業生活に、どの程度、満足していますか	.157	**.215**	.187	**.251**
将来の目標や自分のやりたいことが、どの程度、明確ですか	.175	.157	.192	.193
自尊心（自己評価）得点	.111	.109	.124	.138
（これまでの人生は）本人の能力によって決まってきた	.003	−.036	.014	−.026
（これまでの人生は）本人の努力によって決まってきた	.046	.022	.066	.048
（これまでの人生は）周囲の環境によって決まってきた	−.002	−.060	.007	−.023
（これまでの人生は）運によって決まってきた	−.025	−.068	−.029	−.053

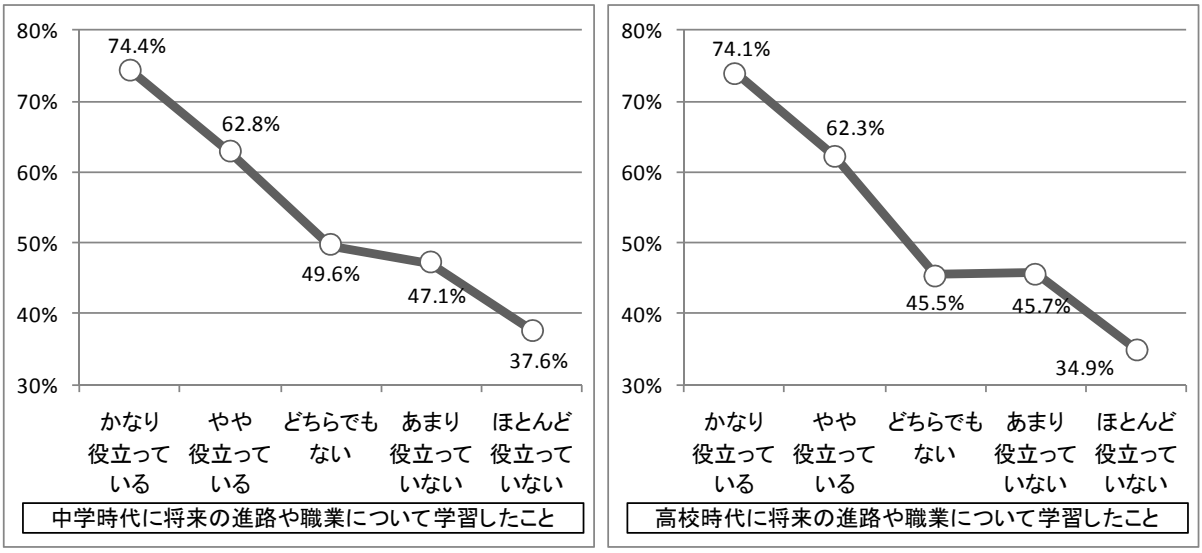
※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。
※「自尊心（自己評価）得点」は、心理学研究でよく使用されているRosenberg(1965)の自尊心尺度（山本・松井・山成，1982）によって測定。項目は以下のとおり。「少なくとも人並みには、価値のある人間である」「色々な良い素質をもっている」「敗北者だと思うことがよくある」「物事を人並みには、うまくやれる」「自分には、自慢できるところがあまりない」「自分に対して肯定的である」「だいたいにおいて、自分に満足している」「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」「自分は全くだめな人間だと思うことがある」「何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う」。これら10項目の意味内容から得点の方向を揃えて合計得点を求めたものを自尊心得点とした。【引用文献】山本真理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，30，64-68。

図表５－２には、現状に対する満足感が学校時代のキャリア教育の評価と具体的にどのように関連しているのかを検討するために、これまでの職業生活に対する満足感別にみた学校時代のキャリア教育の評価をグラフで示した。中学時代・高校時代に将来の進路や職業について学習したことのどちらの場合でも、「覚えている」「役立っている」という評価は、これまでの職業生活に対する満足感と直線的に関連していることが示される。

図表５－３は、図表５－２の縦軸と横軸を逆にしてグラフにしたものである。仮に、中学校時代、高校時代のキャリア教育がこれまでの職業生活に対する満足感に影響を与えているという因果関係があると考えることができるとすれば、このグラフから、学校時代のキャリア教育が役立っているほど、現在に至るまでの職業生活の満足感は高いということが言える。



図表5―2　これまでの職業生活に対する満足感別にみた学校時代のキャリア教育の評価



図表5―3　学校時代のキャリア教育の評価別にみたこれまでの職業生活に対する満足感

（「満足している」＋「おおむね満足している」の割合）

ただし、具体的にどのような授業や行事が記憶にあるのかという点では、図表５－４に示したとおり、これまでの職業生活全般に満足している者とそうでない者で大きな違いはみられなかった。強いて言えば、大学時代のキャリア教育で満足している者とそうでない者で違いが大きいと言えるが、顕著な結果ではなかった。これらの結果から、記憶に残る具体的な授業や行事があり、それゆえ学校時代のキャリア教育の評価が高く、その結果、これまでの職業生活が満足のいくものになっているというよりは、同じような授業や行事を記憶しているにも関わらず、個々人によって現在の満足感やキャリア教育全体に対する評価との関わりが異なるということが言える。

図表５－４　これまでの職業生活に対する職業満足感と
学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものとの関連

これまでの職業生活に、どの程度、満足していますか		満足している N=1859	満足していない N=2050
大学	自分の性格を理解するための検査	44.8%	40.2%
	職場体験学習やインターンシップ	34.0%	27.4%
	進路の目標や計画を考える授業	20.7%	16.5%
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	35.4%	29.8%
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	23.6%	19.3%

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

なお、図表５－５に示したとおり、将来の目標の明確さと学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものとの関連は、比較的、広範にみられた。中学時代・高校時代・大学時代と一貫して、将来の目標が明確である者の方が学校時代に行った授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。

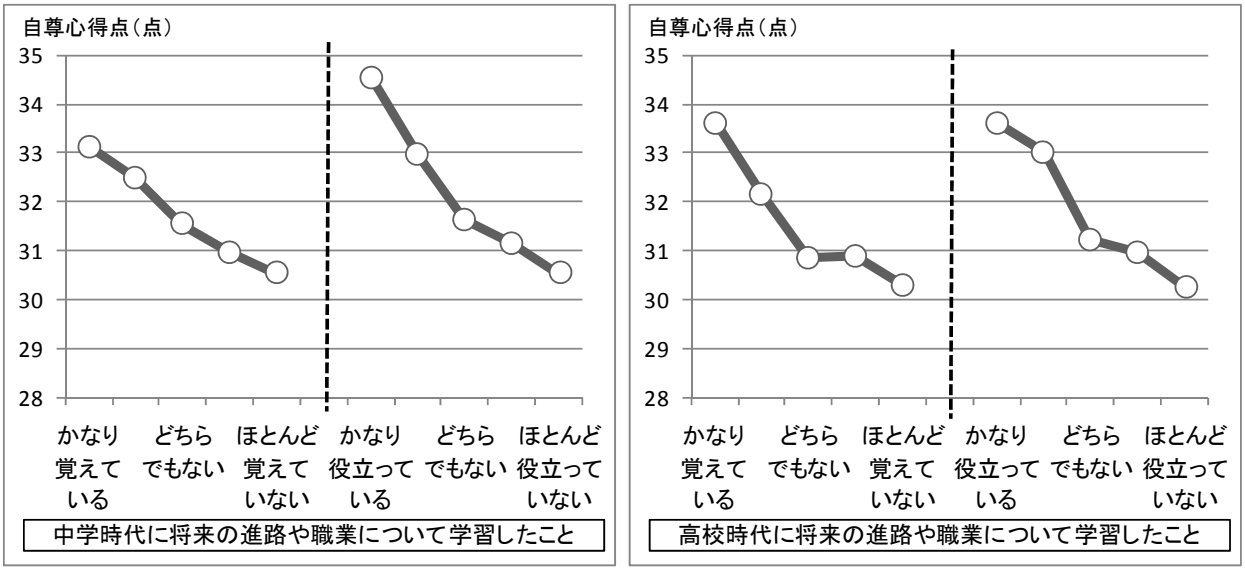
図表５－５　将来の目標の明確さと学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものとの関連

将来の目標や自分のやりたいことが、どの程度、明確ですか		明確である N=2091	明確でない N=1818
中学	自分の性格を理解するための検査	23.3%	19.8%
	ボランティアなどの体験活動	34.2%	29.2%
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	6.8%	4.7%
高校	ボランティアなどの体験活動	22.1%	18.0%
	進路に関する個別相談やカウンセリング	43.7%	39.0%
	進路の目標や計画を考える授業	34.1%	29.2%
大学	職業興味や職業適性などの検査	46.6%	40.8%
	職業や仕事を調べる授業	23.8%	18.7%
	職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業	20.5%	15.9%
	職場体験学習やインターンシップ	34.0%	26.6%
	ボランティアなどの体験活動	17.5%	13.1%
	進路に関する個別相談やカウンセリング	32.6%	25.1%
	進路の目標や計画を考える授業	20.1%	16.6%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	51.0%	45.5%
	労働法（働くことに関する法律）に関する授業	24.9%	17.2%

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

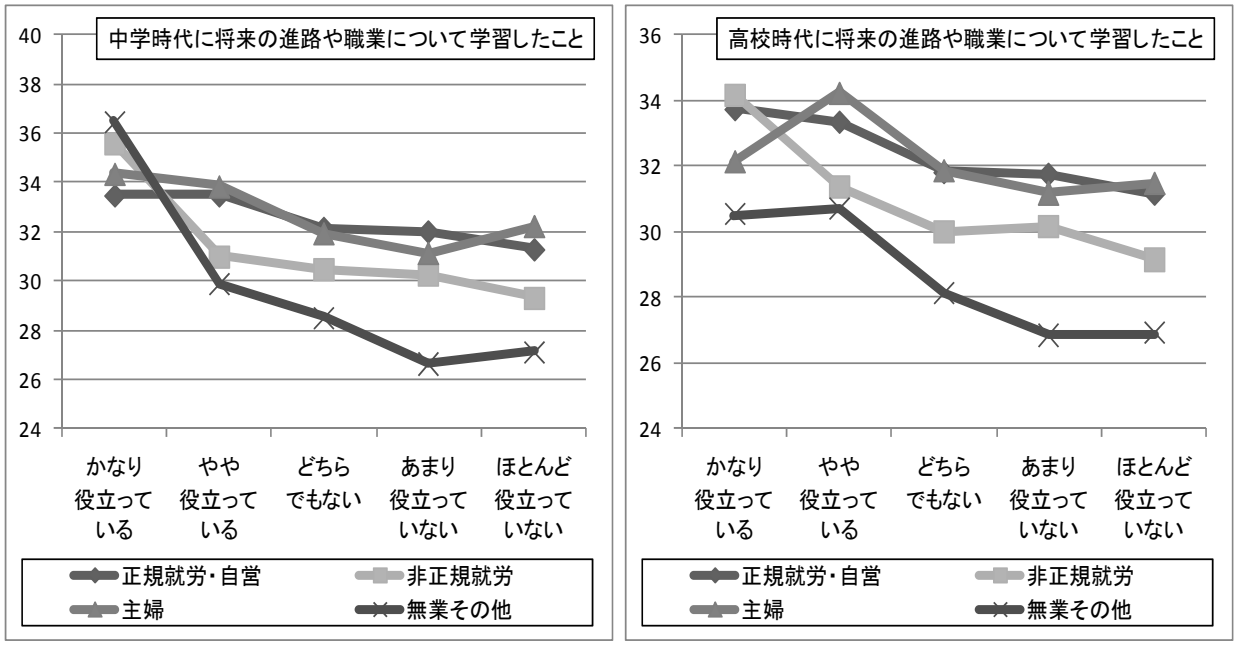
２．自尊心と学校時代のキャリア教育の評価との関連

前節の図表５－１では、自尊心が学校時代のキャリア教育の評価と関連していた。図表５－６は、具体的に両者の関連をグラフに示したものである。学校時代のキャリア教育に対する評価と自尊心得点には直線的な関連がみられており、自尊心が高ければ高いほど、学校時代のキャリア教育に対する評価も高かった。

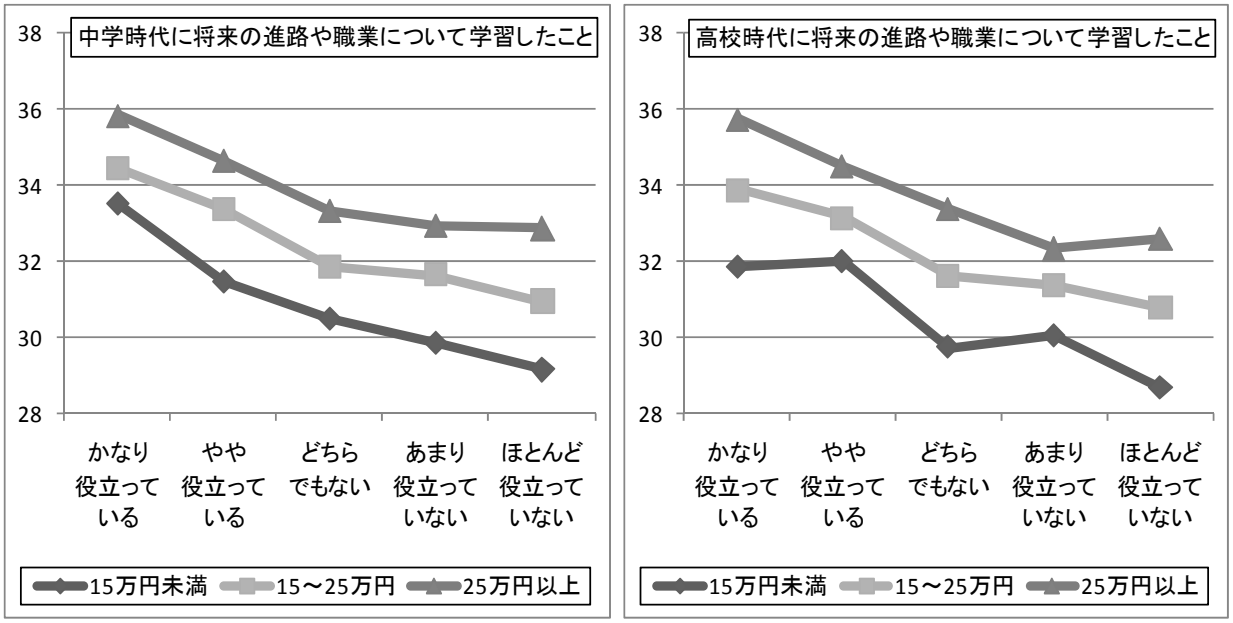


図表５－６　学校時代のキャリア教育の評価別の自尊心得点の平均値

ただし、図表５－７および図表５－８に示したとおり、非正規就労や無業その他の者、１ヶ月の収入が 15 万円未満の者は総じて自尊心が低いとは言え、これらの者であっても、学校のキャリア教育が役立っていると考えている場合には、それほど自尊心が低くないと解釈できる結果も得られた。これは、キャリア教育の効果が、たんに職業生活に影響を与えるのみならず、職業生活の状態に関わらず高い自尊心を保ち続けることに波及する可能性を示すと考えられる。



図表５－７　現在の身分・立場別および学校時代のキャリア教育に対する評価別にみた自尊心得点の平均値



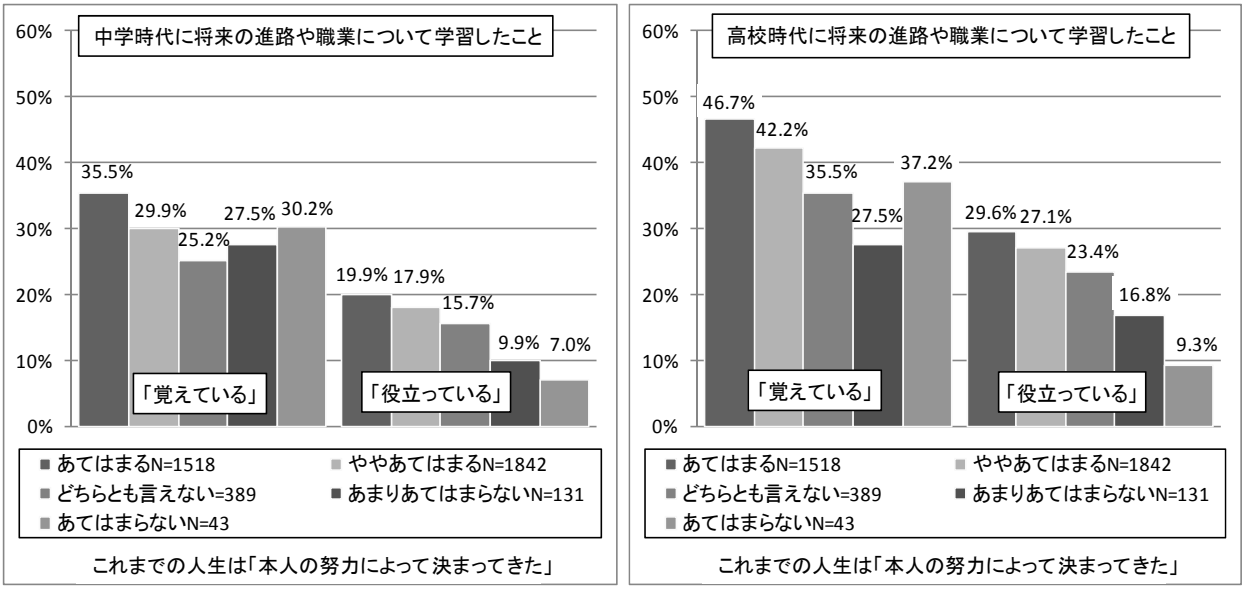
図表５－８　1ヶ月の平均収入別および学校時代のキャリア教育に対する評価別にみた自尊心得点の平均値

3. 人生に対する考え方と学校時代のキャリア教育の評価との関連

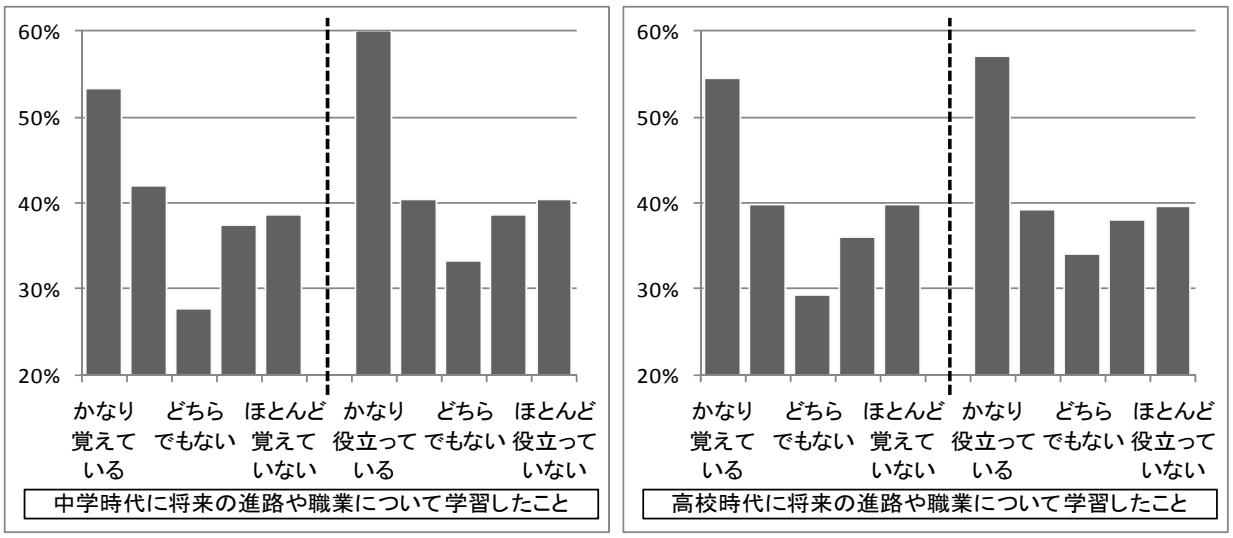
本調査では、これまでの人生がどのように決まってきたと思うかについて、「本人の能力によって決まる」「本人の努力によって決まる」「周囲の環境によって決まる」「運によって決まる」の４つの側面からたずねた。これらは、より専門的には人生の原因帰属を簡単な質問項目によって測定したものであり、本人の自尊心や満足感などと関連するとされていることから、本研究に含めた。

その結果、先に図表５－１に示したとおり、おもに人生が「本人の努力によって決まる」と考えるか否かが、学校時代のキャリア教育に対する評価と密接に関連していた。具体的には、図表５－９に示したとおり、学校時代のキャリア教育が「役立っている」ほど、人生は本人の努力によって決まると考える割合が高かった。学校時代のキャリア教育を「覚えている」か否かについても同様であり、「覚えている」ほど本人の努力によって決まると考える割合が高かった。一方で、人生は本人の努力によって決まると考えていない者も学校時代のキャリア教育を覚えていると回答した割合が高く、U字形の関連がみられていた。

図表５－１０は、図表５－９の縦軸と横軸を逆にして、仮に学校時代のキャリア教育に対する評価が「これまでの人生は努力によって決まる」という回答に影響を与えると考えられるとすれば、どのようなグラフの形状になるかをみたものである。図表５－１０では、中学・高校時代のキャリア教育を「覚えている」「役立っている」のいずれのグラフについても肯定的に回答した者もそうでない者も「これまでの人生は努力によって決まる」と考えていた。このグラフでは、学校時代のキャリア教育に対する評価と「これまでの人生は努力によって決まってきた」に対する回答は、明白にU字型の関係となっているのが分かる。



図表５－９ 「これまでの人生は努力によって決まってきた」に対する回答別の
学校時代のキャリア教育に対する評価



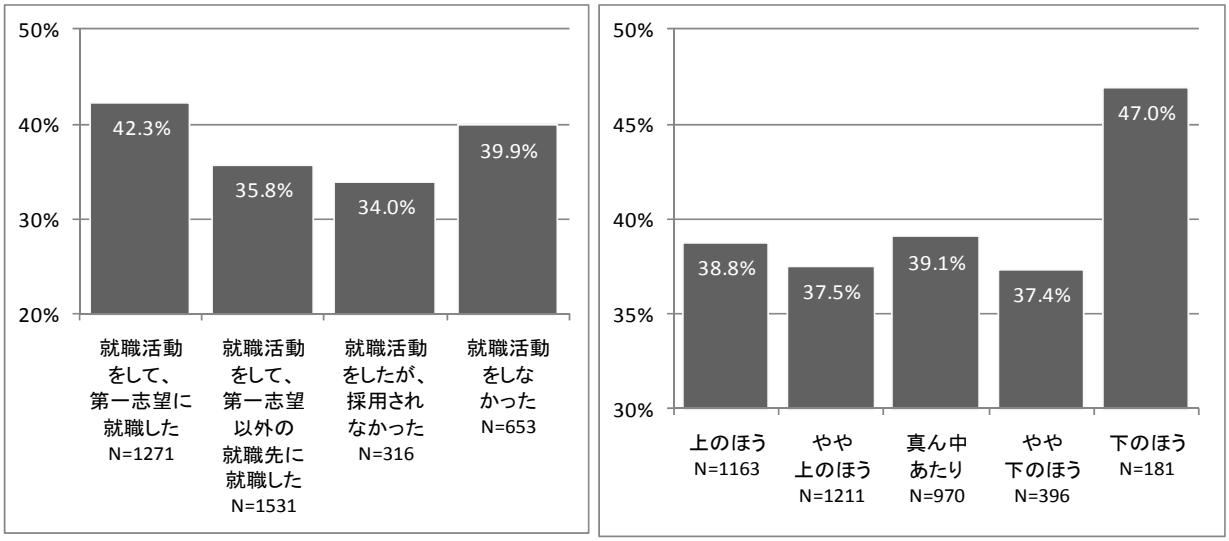
図表５－１０ 学校時代のキャリア教育に対する評価別にみた
「これまでの人生は努力によって決まってきた」に「あてはまる」と回答した割合

「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問は、学校時代のキャリア教育と特に関連していたが、その関連のしかたは直線的ではなかった。そこで、以下に、その背景を検討することとした。

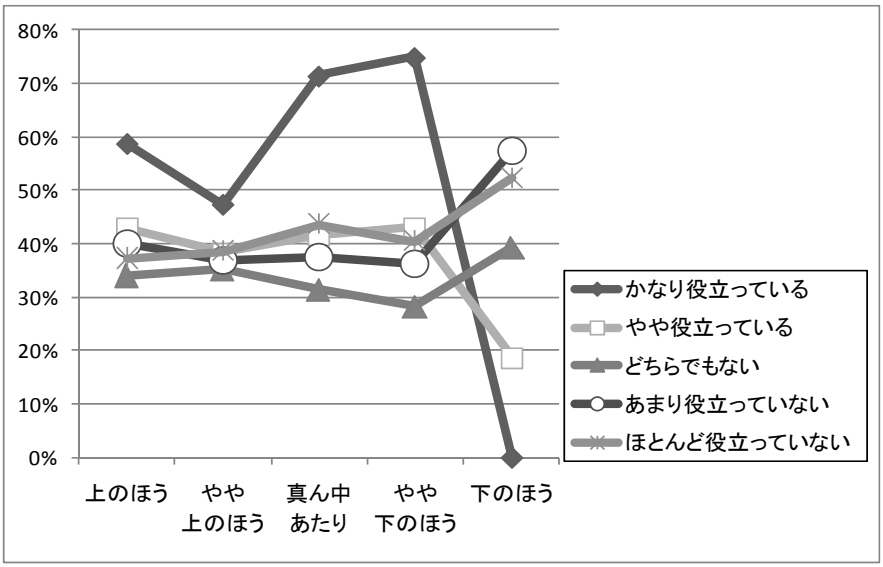
まず、「これまでの人生は努力によって決まってきた」と関連が深い要因を検討した。その結果、学校時代の就職活動と関連が深いことが示された。図表５－１１左に示したとおり、「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問に対して「あてはまる」と回答した割合は「就職活動をして、第一志望に就職した」者が最も高く、以下「就職活動をして、

第一志望以外の就職先に就職した」「就職活動をしたが、採用されなかった」の順に続いていた。ただし、「就職活動をしなかった」者も「あてはまる」と回答する割合が高かった。同様の傾向は、中学校時代の学業成績との関連でもみられた。図表５－１１右に示したとおり、中学校時代の学業成績が「下のほう」と回答した者が、「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問に対して「あてはまる」と回答した割合が最も高かった。

さらに、図表５－１２に示したとおり、中学校時代の学業成績が「下のほう」と回答した者は、中学校時代のキャリア教育が役立たなかったと回答した者の方が、「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問に対して「あてはまる」と回答した割合が高かった。



図表５－１１　学校卒業時の就職活動別（左）および中学校の学業成績別（右）にみた
「これまでの人生は努力によって決まってきた」に「あてはまる」と回答した割合



図表５－１２　中学校の学業成績別および中学校のキャリア教育の評価別にみた
「これまでの人生は努力によって決まってきた」に「あてはまる」と回答した割合

これらの結果を重ね合わせて解釈すると、「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問に「あてはまる」と回答する背景には２つの場合があることが推測される。１つには、中学や高校時代のキャリア教育をよく覚えており、役立っているという感覚をもっている者、また学校卒業時に第一志望の就職先に就職できるなど上首尾な就職活動を行えた者。こうした回答者は、いわば自分の努力は正当に評価されてきたという思いを抱いていることが想定され、自分の人生がうまくいってきたからこそ「これまでの人生は努力によって決まってきた」と素朴に思えるグループであると言えよう。

しかし、もう１つ、中学・高校時代のキャリア教育を覚えてはいるが役立っているという感覚はもっていない者、中学時代の学業成績も下のほうであった者、就職活動をしなかった者は、むしろ、自分のこれまでの人生がそれほどうまくいってきたとは思えないからこそ、なおさら「これまでの人生は努力によって決まってきた」と考えるグループがあると言える。このグループでは、あるいは劣位の状態にある自身の現状を跳ね返すために努力を過剰に評価するとも解釈できるが、より素朴に自分が努力不足だったからこうなったという意味で自分の人生は努力（の少なさ）によって決まってきたと考えているとも解釈できよう。

上記の解釈は、回帰分析の結果でも言えそうであったので、図表５－１３にその結果を示した。表から、学校卒業時の就職活動の成否が人生は努力で決まるという思いに大きな影響を与えており、第一志望以外に就職した者、就職活動をしたが採用されなかった者は「人生

図表５－１３ 「これまでの人生は努力によって決まってきた」に「あてはまる」と回答するか否かに影響を与える要因（ロジスティック回帰分析）

	B	Exp(B)	sig.
中学校時代の成績	.058	1.060	+
学校卒業時の就職活動（vs.就職活動をして第一志望に就職した）			
就職活動をして、第一志望以外に就職した	−.269	.764	**
就職活動をしたが、採用されなかった	−.278	.757	+
就職活動をしなかった	.031	1.031	
その他	.216	1.241	
学校卒業直後の働き方（vs.正社員・正職員）			
非正社員・非正職員・その他	.163	1.178	
無業	−.099	.906	
正社員期間	.092	1.096	
非正社員期間	−.045	.956	
1ヶ月の平均収入	.044	1.045	
中学時代のキャリア教育を覚えている	.072	1.074	+
中学時代のキャリア教育は役立っている	−.117	.889	*
高校時代のキャリア教育を覚えている	.034	1.035	
高校時代のキャリア教育は役立っている	.063	1.065	
性別	.050	1.051	
年齢	−.020	.980	
学歴（vs.大卒）			
大学中退	−.089	.914	
高卒	−.207	.813	+
高卒中退	.628	1.873	

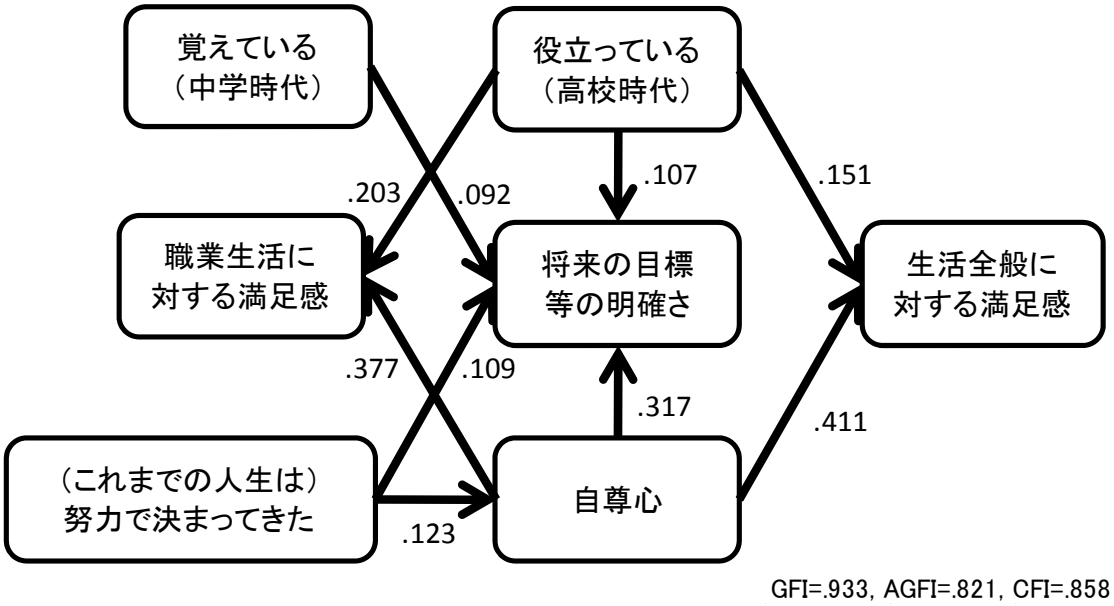
※「「これまでの人生は努力によって決まってきた」という設問に「あてはまる」と回答したか否かを被説明変数としたロジスティック回帰分析の結果。当該被説明変数に関連が深いと思われた要因を説明変数とした。有意水準は、+ p<.10 * p<.05 ** p<.01。

は努力によって決まってきた」とは思っていないことが分かる。また、中学時代のキャリア教育を「役立っている」と回答した者の方が「人生は努力によって決まってきた」とは思っていなかった。ここには図表５－１１および図表５－１２に示したような、中学時代のキャリア教育が人生は努力で決まるという思いに影響を与える複雑な様相がうかがえる。なお、その他にも中学時代の成績が良いほど人生は努力で決まると思い、または大卒に比べると高卒はそのようには思っていなかったことも示されていた。

4. 学校時代のキャリア教育と就労意識との関連（まとめ）

最後に本章のまとめとして、本章で検討した変数（現在の生活全般に対する満足感、これまでの職業生活に対する満足感、将来の目標・やりたいことの明確さ、自尊心、これまでの人生は本人の能力・本人の努力・周囲の環境・運によって決まってきた）間の関連をより明確な形でモデル化して示すこととした。

図表５－１４に、現在の就労意識と学校時代のキャリア教育に対する評価の関連モデルを示した。現在の満足感や目標の明確さに、学校時代のキャリア教育や自尊心はどのような影響を与えているかという観点でモデルを設定し、共分散構造分析を用いて推計を行ったところ、図に示した関連モデルが最も適合性が高かった。



図表５－１４　現在の就労意識と学校時代のキャリア教育に対する評価の関連モデル
（共分散構造分析による推計）

図表から、以下の４点を指摘できる。

①職業生活に対する満足感、将来の目標等の明確さ、生活全般に対する満足感には、高校時代のキャリア教育が「役立っている」という評価が全般的に影響を与えていた。

②本人の自尊心も、職業生活に対する満足感、将来の目標等の明確さ、生活全般に対する満足感に全般的な影響を与えていた。

③これまでの人生は自分の努力で決まってきたという感覚は、将来の目標の明確さや自尊心に影響を与えていた。

④中学時代のキャリア教育を「覚えている」か否かも将来の目標が明確さに影響を与えていた。

以上の結果から、学校時代のキャリア教育は、基本的に現在の満足感や将来の目標の明確さなどと広く関係していることが示された。特に、高校時代のキャリア教育が「役立っている」という感覚は強い影響を与えていた。さらに、上記の分析の過程で、現在の自尊心は、現在の満足感や将来の目標の明確さを下支えする重要な要因であることが示された。

従来、キャリア教育では、キャリアや就職に関わる事がらのみを指導目標とすることが多かったが、本人の根本的な自尊心は若者の就労意識に全般的な影響を与えていることを重視すれば、こうした自尊心をいかなる形でキャリア教育に組み込んでいくのか（組み込まないのか)、また、労働行政の側からはどのような側面的なサポートが可能なのか等について、ある種の萌芽的な議論がなされて良いと思われる。

なお、本章の結果においても、総じて満足感が高く、自尊心も高く、就職活動で第一志望の就職先に就職するような回答者は、学校時代のキャリア教育は総じて評価が高いことが示された。一方で、中学時代の学業成績が悪く、相対的に就職活動の成否が上首尾なものではない回答者は、学校時代のキャリア教育は総じて評価が低いことが示された。同時に、こうした回答者は人生は努力で決まると考えている割合も、分析結果によっては高かった。

以上の結果から、本章においても、やはり学校時代の成績がよく、就職活動もうまく行い、学校卒業後のキャリアも良好な若者グループと、そうではない若者グループの２つの層があり、前者においては、現行のキャリア教育は総じて有効・有益であると評価されるが、後者にとっては十分に有効・有益なキャリア教育になりえていない現状が透かし見られる結果となった。ここからは、相対的に困難を抱えやすいヴァルネラブル（vulnerable 傷つきやすい）な若者に、何らかの形で自尊心をもたせることを主眼とする介入・取り組みを行うキャリア教育の必要性が示唆される。

上記図表５－１４に示したとおり、自尊心は、現在の職業生活・生活全般に対する満足感および将来の目標等の明確さを下支えする。仮に、本人のキャリアが何らかの問題を抱えており、それゆえキャリア発達上の痛手を受けたとしても、それに耐えるのも、そこから立ち上がるのも、まずは基本的・根本的な自尊心が必要となろう。こうしたヴァルネラブルな若者に対する取り組みを、学校段階のキャリア教育においていかに行うのか（行わないのか）の検討はなされて良いと思われる。同時に、本来、学校で身につけておくべき基本的・根本的な自尊心を何らかの形で傷つけてしまった若者に対しては、単に就労支援のみを提供するのではなく、教育行政および労働行政が応分の責任を持って連携して事に当たることによっ

て、自尊心を高めるような介入を行うことが必要となる。

実際、本章図表５－７および図表５－８に示したとおり、現在の仕事上の立場が非正規や無業であっても、また、現在の収入が低かったとしても、学校時代のキャリア教育が役立っていると思える場合には自尊心は高まっていた。本章の結果から、こうした自尊心が満足感や目標の明確さにつながることは明白であり、政策的な介入の１つの目安として自尊心を念頭に置いておくことは、今後のより効果的な就労支援やキャリアガイダンスを考える上で不可欠であると言えよう。

【引用文献】

山本真理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，30，64-68。